

## 北ケニア牧畜民レンディーレの開拓村におけるミルク販売

菊川 水 際\*

Milk Sale of the Urban Rendille in Northern Kenya

KIKUGAWA Migiwa

The Rendille are the herders who rear livestock of camels, cattle, goats and sheep in the arid lowlands of northern Kenya. Since the early 1970s, because of drought and development projects by the government or NGOs, some of the Rendille, especially the ones who did not own enough animals, have migrated into the urban areas to look for new economic opportunities. Presently, nearly 30% of the Rendille reside in sedentarized villages near towns.

I did fieldwork in one of the sedentarized villages for 15 months in total from 1998 to 2000. In that village, there were co-wives who left their husbands in their pastoral communities, divorced women with children, single-mothers, and so on. Those women are not as visible in the pastoral communities as in the urban villages. In my research, I focus on those women in order to describe their gender roles in subsistence and ideologies on marriage in contrast to individual practices, and highlight the latter especially in the description of a polygynous household. The purpose of describing diversities among individual women's practices is to show how the diversities might contribute to the re-organization, rather than disruption, of the Rendille community.

In this paper, I introduce milk sale by the urban Rendille women. I investigated the distribution of profit from the milk sale among women and men. The profit of milk sale was spent mainly for feeding families. Once the milk sale provides a woman with extra cash, which enables her to buy her own goods, her husband tried to prevent her from gaining the profit. In this respect, it can be concluded that the urban Rendille have gained an access to the cash economy in town through the milk sales, but also maintained their own sharing system among men and women, which can be seen in pastoral villages.

---

\* 筑波大学大学院地域研究研究科／歴史・人類学系  
Master's Program in Area Studies/Institute of History & Anthropology, University of Tsukuba.

### 1-1. 研究の背景と目的

アフリカの乾燥地帯で遊牧生活を営む牧畜社会は、自然環境と社会環境に適応した生活様式をつくりあげてきた。しかし、近年、政府や開発団体などの外発的な近代化政策によって、定住化、家畜や畜産物の現金化、生計の多角化といった新たな状況に直面している。本研究は、このような新たな状況に対する牧畜社会の対応を、生計活動における性別役割（ジェンダー）に着目して明らかにすることを目的としている。

アフリカの牧畜社会を対象とした開発と変化の文脈の中で、ジェンダーは主に1970年代以降から、男女間の役割分担と資源の分配といった観点からとりあげられてきた（Buhl & Homewood 2000）。1980年代には、牧畜社会の女性たちは開発の悪影響を受けているといったような開発悲観論が描かれた（Dahl 1987；Talle 1988）。開発悲観論の文脈においては、アフリカの牧畜社会の多くは父系であり、家畜や土地に対する女性の権利及び労働に対する決定権が開発に伴ってさらに制限される上に、女性への労働過多も顕著化しているといったことが指摘された。事実、アフリカの牧畜社会の多くでは、男性の采配による家畜の市場化から女性が締め出される傾向がある。現金経済の浸透に伴って、牧畜世帯の生計が牧畜民の主食であるミルク販売による収益に依存しはじめると、女性の個人的なニーズのためにミルクが使用されにくくなっている。

1990年代には、牧畜社会における女性の積極的な商業活動に焦点が当てられた。特に、女性によるミルク販売には、新たな状況に対応する牧畜女性の経済活動として積極的な意味付けがなされた（Little 1994）。また、畜産物であるミルクのみならず農産物などの売却によって得られた現金収入が、伝統的な性別役割や男女の地位に与える影響なども伝統的な生活様式に規定されたジェンダーが変容していく要因として検討された（Fratkin & Smith 1995；Smith 1997, 1998；Buhl & Homewood 2000）。西アフリカのフラニ社会を対象とした研究（Buhl & Homewood 2000）では、ミルク販売による収益が、主食の購入よりも、家具、食器、装飾品などの購入に多く費やされており、所有財産に関係なく女性たちがミルク販売を行っている状況が報告された。フラニ族に関する古典的な研究では、女性は、ミルクの搾乳、加工、売却を行い、その収益で家計を支える存在として位置付けられていた。しかし、この研究から、ミルク販売が単に食料品の購入といった生理的の充足に留まらず、女性の個人的な必要（家畜の購入、生活必需品、装飾品など）の充足にまで及んでいる事実が示された。

一方、北ケニアのラクダ遊牧民レンディーレの開拓農村を対象にした研究では、開拓農村における女性の労働時間が、大規模な家畜群を持つ牧村の女性より短縮されている一方で、農産物を生産し売却する女性が経済的に自立していると報告された（Fratkin & Smith 1995；Smith 1997, 1998）。町場の商業の中でも、ミルク販売の場合、換金に使用されるミルクの量は、泌乳ウシを所有・管理する男性の決定によって制限されるが、土地所有観念が定着していない開拓農村では農産物の販売に対する女性の決定権は男性の制約を受けにくいといった議論がなされた。

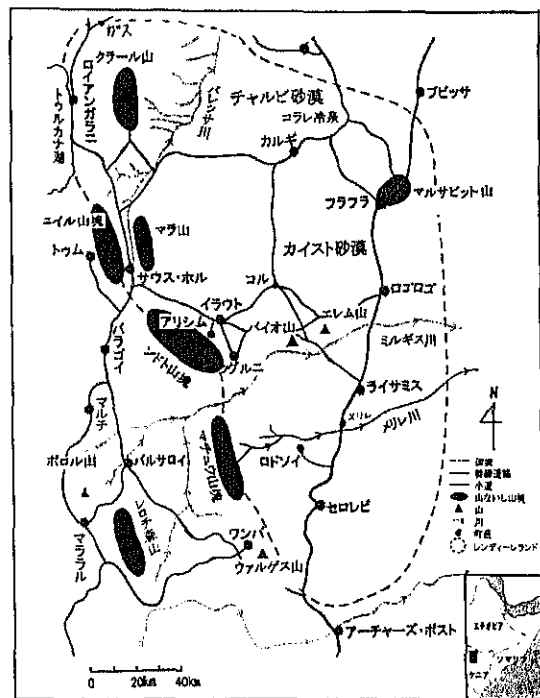
以上のような先行研究の結果を受けて、本研究では、北ケニアのラクダ遊牧民であるレンディーレを調査対象にし、彼らが形成した開拓村における性別役割に着目している。しかし、従来のジェンダー研究のように、現金が女性の社会的地位や経済的自立に与えた影響を検討することを目的とはしていない。ジェンダーを性別役割といった観点から捉えれば、それは究極的に個人の視点を軽視した社会統合をテーマにしたものでしかない。本研究では、ジェンダーの視点に加えて、個人の移住にまつわるライフヒストリーを応用しながら、牧畜社会がいかに個々人によって再統合されていくのかを描き出すことを目的としている。

そこで本論では、牧畜民の開拓村で盛んに行われているミルク販売に着目し、長期調査で得られた一次資料に基づいてその実態を明らかにする。ここでは、主に、販売用ミルクを提供するウシの放牧キャンプ、フラフラ村、マルサビットの市場といった3つの活動場所を拠点にしたミルク販売のシステムが描かれる。そして、ミルク販売に関わる人間関係と彼らの間で行われている利益配分に着目することで、女性たちが町場近郊で新たに担ったこの役割は、主食であるミルクを分配するといった牧村での伝統的な女性の役割が拡大化したものとして位置付けられることを示す。

## 1-2. レンディーレランドの概要

### 1-2-1. 自然環境

調査地であるレンディーレランド(図1)の面積は、約5万平方キロメートルに及び、その90%が標高300~1,000mの平原地帯で覆われている。その大部分は、中央部から北方に位置するカリスト砂漠とチャルビ砂漠に代表される。一方、北東部には、独立峰であるマルサビット山(標高1,865m)、北西部にクラール山(2,355m)、西部から南西部にかけてマラ山(2,260m)、ニール山塊(3,010m)、ンドト山塊(2,855m)、マチューム山塊(2,688m)、中央部にバイオ山(1,751m)とエテム山(1,028m)といったように、1,000~3,000mの山々が位置している。全体としては、西方から東方に標高が緩やかに低くなっている。



(佐藤：1992より作成)

図1 レンディーレランド

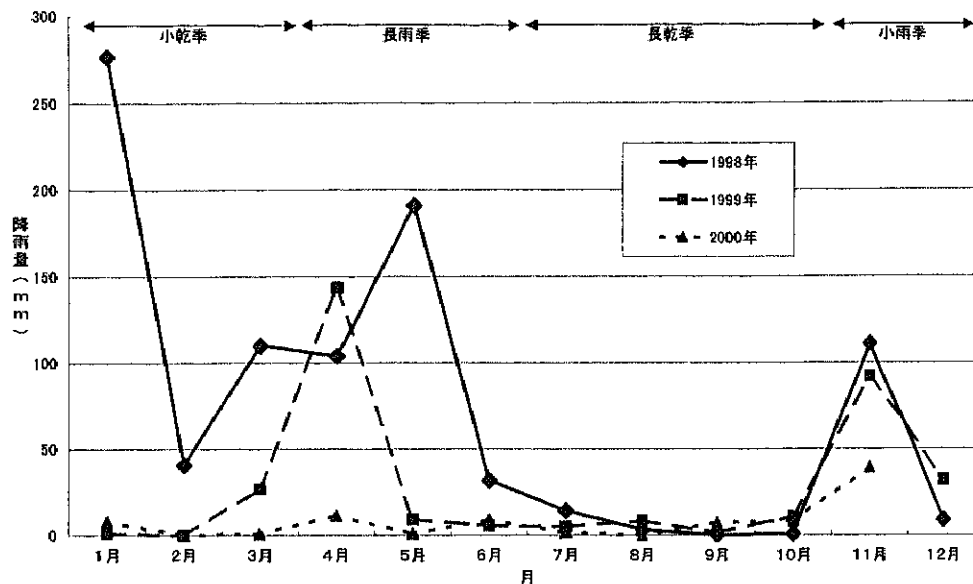


図2 マルサビットの1998年から2000年までの年間降水量（データはケニア気象庁による）

レンディーランドの1日の気温は20～40℃と大きく変化するが、年間を通した気温の変化は少ない。1年は、1～3月の小乾季 (*nábha-ki-gaabán*)、4～6月の長雨季 (*guu*)、7～10月の長乾季 (*nábha-ki-derdéer*)、11～12月の小雨季 (*iel*) に分けられる。湿度は全般的に低い、平原地帯と山岳地帯で年間降水量に差がみられる。平原地帯の年間降水量は250mm以下であり、山岳地帯は900mm程度である。しかし、後者の場合、400mm以下の年もあれば1,000mmを越す年もある。例えば、山岳地帯に位置する県都マルサビットの年間降雨量（1998年1月から2000年11月）を月別にみると（図2）、雨季にあたる月には乾季よりも高い降雨量があるものの、年によって降雨量に大きな差がみとめられる。

マルサビット山上では、トウモロコシ、マメ、キャベツ、タマネギ、ジャガイモ、トマト、スクマウィキなどが栽培されている。一方、年間降雨量が250mm以下である平原地帯に灌漑設備はなく、農業は行われていない。そこでは、乾燥に強くミルクを安定的に提供できるラクダ (*gáal*) に依存した遊牧生活が営まれている。ラクダのほかにも、ウシ (*lôyyo*) と小家畜（ヤギとヒツジ：*ádi*）が飼養されているが、ウシは平原地帯よりも、給水、採食、家畜売買に適した山岳地帯で集中的に遊牧される。

### 1-2-2. 周辺民族と歴史的背景

レンディーランドとその周辺には、東クシ諸語と東スーダン諸語の遊牧民族が分布している。東クシ諸語は、オロモ系の民族（ダサネッチとボラナ）、ソマリ系（ソマリ）、ソマロイド系（ガリ、ガブラ、サクエ、レンディーレ）に（Schlee 1989）、東スーダン諸語は、東ナイル

系の民族（トゥルカナ、サンプル、アリアル）によって構成されている。概して、レンディーレ、ソマリ、ガブラはラクダ遊牧民である。ウシ遊牧民は、ダサネッチ、ボラナ、ガリ、サクエ、トゥルカナ、サンプル、アリアルである。その他にも、トゥルカナ湖東岸で漁労と小家畜の飼養を行うエルモロ族、ンドト山塊で野生植物や蜂蜜の採集と小家畜の飼養を行うドロボー族、そして、1920年代にイギリス植民地政府によるマルサビット山の農業開発のためにエチオピア南部から移住してきた農耕民（ブルジとコンソ）が存在する（図3）。

レンディーレ、ダサネッチ、ボラナ、ソマリ、ブルジ、コンソ、トゥルカナ、サンプルは固有の言語を持つ。但し、マルサビットに居住するダサネッチ、ブルジ、コンソの大部分はボラナ語を使用している。固有の言語を持たないガブラとサクエはボラナ語を、エルモロとドロボーはサンプル語を使用している。ガリはボラナ語とソマリ語を、アリアルはサンプル語とレンディーレ語を併用している。レンディーレは、東クシ諸語と東スーダン諸語の民族の狭間で、固有の言語を持つ民族である。その人口は、1989年現在で、26,536人である（Kenya Government 1994）。

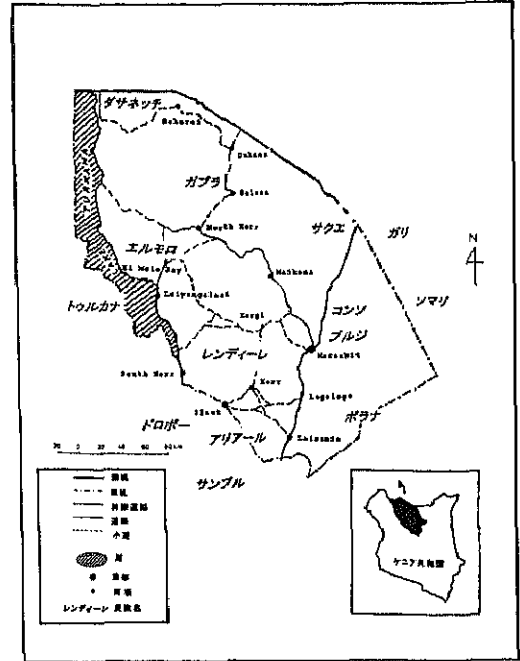


図3 マルサビット県における民俗分布

### 1-2-3. 開発政策

ケニア共和国が1963年に独立して以来、政府、キリスト教会、そして援助団体による開発政策によって、レンディーレランドの各地に町場が発達した。この間、レンディーレランドは4回にわたる旱魃（1968～1973年、1982～1984年、1992年、及び1996年）を経験しており、政府

<sup>1</sup> レンディーレと呼ばれる人々は、固有レンディーレ、アリアル・レンディーレ、オドラ・レンディーレの3つに区分されている（Spencer 1973）。固有レンディーレは、独自の年齢体系と9つの父系クラン（デュブサイ、ナハガン、マタルバ、レングモ、ウイヤム、サレ、ウルウェン、ガルディーラン、そしてトuppチャ）が存在する。アリアル・レンディーレは、ラクダ遊牧民である固有レンディーレとウシと小家畜を飼養するウシ遊牧民サンプルとの混成集団であり、5つの胞族（モソラ、イトウリア、ノグリチュ、オンゲリ、そしてルクマイ）に区分される。彼らは、レンディーレ語よりもサンプル語を主に話す。オドラ・レンディーレは、固有レンディーレと隣接する牧畜民ガブラとボラナとの混合集団である。本論では、アリアル・レンディーレをアリアル、オドラ・レンディーレをオドラと称す。

や国際機関の開発団体は、遊動生活を営んでいた遊牧民を定住化させ、彼らの財産である家畜を換金化させるような開発政策を行った (Fratkin 1991)。

その代表的なプロジェクトが、ユネスコのIPAL (Integrated Project in Arid Lands) であり、ケニアでは1976年から1985年まで実地された。この開発プロジェクトによると、乾燥地帯の遊牧民による家畜の放牧は砂漠化を促進させ、環境の悪化につながっているといた大前提のもとに、遊牧民の家畜を換金化し、定住化させるために市場基盤を整備した (Fratkin 1991)。その際、遊牧民の社会に農業技術を導入し、道路建設や夜警といった賃労の機会を与えるなど現金経済を浸透させることも試みられた。キリスト教会による学校や医療施設、開発団体による援助物資の配給、生活必需品の販売を行う小売店、現金取引による家畜市などを中心とした町場がレンディーランドの各地に形成され、その周辺に集落が定着しはじめた。それと同時に、農耕が可能な山岳地帯では農業開拓村が形成された (Smith 1997)。牧畜を専門的に行っていた人口の一部は、農業、商業、賃労など新たな経済活動に従事しはじめた。

しかし、レンディーレが全ての家畜を手放すようなことはなかった。牧村のレンディーレは、市場での需要価値が高いウシを飼養し売却することで新たな現金経済に対応しつつも、乾燥に強いラクダを保持することで旱魃をしのいできた (Sato 1997)。また、季節移動する放牧キャンプから集落を切り離すことで、学校教育、医療、援助物資、現金取引など新たな社会環境に対応しながら家畜の放牧体制を維持させている (孫 2001)。現在も、北ケニアの乾燥地帯における家畜に依存したレンディーレの遊動生活は、外部からの影響を受けつつ維持されている。

### 1-3. 調査の概要

著者がはじめてレンディーランドに足を踏み入れたのは、1996年8月の予備調査であった。予備調査では、コル町から約9 kmのところにある牧村集落とその放牧キャンプ、及び県都マルサビットの町場を訪問した。そこでは、集落とキャンプの人口と居住形態に関する聞き取り調査、日常の活動の参与観察を行うと同時に、レンディーレ語の習得を試みた。

さらに、1998年8月～1999年3月、及び1999年8月～2000年2月 (合計15ヶ月) にわたって、マルサビットから南西7キロに位置するレンディーレの開拓村フラフラ村にて住み込み調査を行った。そこでは、レンディーレ語と英語を交えながら、人口と世帯に関する聞き取り調査、経済活動の参与観察、婚姻と移住にまつわるライフヒストリーの収集、マルサビットにおけるレンディーレと周辺民族の関わりに関する聞き取り調査と参与観察を行った。

## 2. 牧村の概略

### 2-1. クラン体系と牧村

レンディーレの出自集団は、父系原理に基づいて、分節レベルの高い順に、半族、クラン、サブクラン、そしてリネージ集団に分類される (佐藤 1992: 70)。レンディーレが日常使用している言葉は、先行研究において分析上使用されてきた用語に必ずしも限定されているわけで

はない。レンディーレは出自集団における分節のちがいを、ベラル (*beŋel*: 半族, 部屋を意味する), ヤフ (*yaáf*: 民族, クラン, サブクランなどを意味する), ゴブ (*góob*: クランと集落を意味する), コホド (*kohodo*: サブクラン, 鞆丸を意味する), クンラル (*kunŋal*: サブクラン, 放牧キャンプの共食場を意味する), ミン (*min*: 種類, 小屋, 家畜の母系系譜などを意味する) などといった言葉で表現している (佐藤 1992: 72-73)。

半族は, 西半族 (*bele-si-baháy*) と東半族 (*bele-si-berí*) に二分される。半族のまとまりは, 年齢組命名式 (*gaalgurme*) や供犠祭 (*sorríyo*) のときに明示される (佐藤 1992: 70)。西半族には, デュブサイ (*Dúbsaháy*), ナハガン (*Nahgáan*), マタルバ (*Matarbáh*), レングモ (*Rengúmo*), ウイヤム (*Uyám*) の5つのクランが, 東半族には, サレ (*Saálle*), ウルウェン (*Urawwéen*), ガルディーラン (*Galdéilan*), トップチャ (*Túbcha*) の4つのクランが含まれる。それぞれのクランは2~6つのサブクランに, サブクランは5~30のリネージ集団に下位区分される (表1)。これらの出自集団は, それぞれ出自の古さを基準に序列化されている。

レンディーレは, クランへの強い帰属意識 (クランシップ) を背景に集団化する。同じクランに所属する人々は共通の祖先を持つと想定されており, クランが外婚的単位となっている<sup>2</sup>。男性は一生を通じて父親のクランに所属し, 女性は結婚すると夫のクランの者と見なされる。

牧村の集落 (*góob*) は同一クラン員を中心に形成されており, 集落の名前はクラン名で呼ばれる。クランを背景にした共住性に基づいて, 集落では儀礼や自治活動, 家畜の放牧や家事などが共同で行われる。牧村集落の規模は, 2~67世帯<sup>3</sup> (3~77戸), 人口17~280人の間で, 平均約30世帯 (33戸), 134人といったように, 集住的な傾向を示していると言われている (佐藤 2000: 8)。1998年に調査を行ったコル町近郊のトップチャ・クランの一集落 (1998年9月現在) は, 58世帯, 273人であり, 比較的大規模な集落であることがわかった。集落の構成員は, クラン員である既婚男性を中心に, 別のクランから婚入してきた彼らの妻とその子供たち, 別のクランへ婚出して妻方居住している彼らの姉妹とその子供たちであった。その内訳は, 全人口273人中, 239人 (88%) がトップチャ・クランの出身者であり, 残りの34人 (12%) がトップチャ・クラン以外の出身者であった (表2)。牧村は, クランを核にして形成されている。

集落の中心部には礼拝場 (*nabo*) があり, その周りを囲むように, 家畜囲い (*sím*) と小屋 (*mún*) がそれぞれ環状に配置される (図4)。小屋の配置には, リネージ間, 世帯間, そして世帯内の序列が明示されている。まず, 出自序列の最も高い小屋が西に建てられ, その小屋

<sup>2</sup> レングモ・クランだけは, オンゴン・サブクランとキバツタル・サブクランの間での婚姻が行われている。この場合でも, 第一夫人が不妊であるような男性で後妻 (*lamo*) を娶る時に限定されている (佐藤 1992: 72)。

<sup>3</sup> 本論において, 世帯は, 既婚男性とその妻たち, 及び未婚の子供たちの集団をあらわす。したがって, 夫を共有する複数の妻たちとそれぞれの子供たちは, すべて同一世帯に所属する。なお, 夫が死亡している寡婦世帯, 妻が死亡している父子世帯, そして, 夫と離婚した女性とその未婚の子供で構成される離婚世帯も, ひとつの世帯として数えている。

表1 レンディーレの出自体系

半族	クラン	サブクラン	リネージ集団の例	
1. 西半族	1. デュブサイ	1. ワンビル	ワンビル, ダバレン	
		2. プリアル	プリアル	
		3. ドホレ	ドホレ, オゴルジェブ, ハジュフレ	
		4. グッデレ	グッデレ	
		5. フルグダ	アランディデ, フレ, ダンブロ	
6. ミルギチャン		ボレ		
2. ナハガン	2. ナハガン	1. マチャン	マチャン	
		2. デュロロ	デュロロ	
		3. ガリゴロブレ	ガリゴロブレ, ミルカルコナ, アラボイ, エイディモレ	
3. マタルバ	3. マタルバ	1. ガリキデレ	ガリキデレ, カート	
		2. フェーチャ	フェーチャ	
4. レングモ	4. レングモ	1. オンゴン	ハラボレ, ガリグレ	
		2. キバツタル	アルベレ, イントレ	
5. ウイヤム	5. ウイヤム	1. バッセリ	ジャーレ, ファロガン	
		2. ガルハイレ	アディアロ, ラパハヨ, ガルマガル	
2. 東半族	1. サレ	1. ネベイ	エルワス, ダンマル, イストル	
		2. ゴボレ	オレ	
		3. ゴバナイ	キモゴル	
		4. ガバナイヨ	ブロ	
		5. ガロレイヨ	アイシンガラジャ	
		6. エレグラ	オベイレ	
	2. ウルウエン	2. ウルウエン	1. ジャツレ	ジャツレ, サンダブ, イキミレ,
			2. オゴン	アリゲレ
			3. テイルティレ	シラモ ドッヘ
	3. ガルディレン	3. ガルディレン	1. エレモ	ケーレ
			2. ガリグーデン	ガロラ
			3. マタチョ	マタチョ
	4. トップチャ	4. トップチャ	1. オルボラ	ガラレ, オルボラ, ポロ
			2. デーレ	レヘモロゴ, ハヌ, ナイヤバ

注) 数字は出自序列を示す。

出典) 佐藤 1992: 71

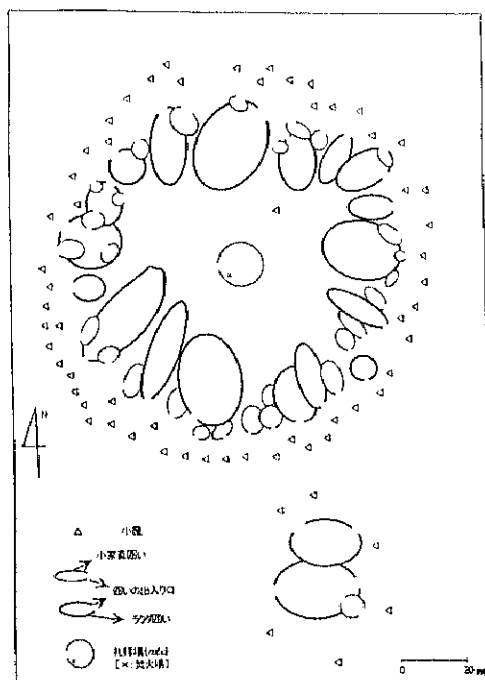
を基準にして出自序列の高い方から低い方に小屋が時計回りの方向に配置されていく。トップチャ・クランの集落を例にとる。トップチャ・クランには、オルボラとデーレといった2つのサブクランがある。オルボラ・サブクランはデーレ・サブクランよりも出自序列が上位である。そのため、オルボラ・サブクランの中で最上位とされるガラレ・リネージの小屋がまず先に建てられる。リネージ集団内では、父は息子よりも、長男（長女）は弟（妹）よりも、そして、第1夫人は第2夫人よりも上位である。このように父系原理に基づいた出自序列をもとにそれぞれの小屋が建てられる。



表2 トゥブチャ集落におけるトゥブチャ・クラン出身者とそれ以外の出身者  
(1998年9月現在)

居住者	トゥブチャ (人)	トゥブチャ以外 (人)	合計 (人)
少年	69	13	82
少女	71	6	77
婦人	52	8	60
長老	36	7	43
青年	11	0	11
合計 (人)	239 [88%]	34 [12%]	273 [100%]

出典) 菊地 2001: 18



(出典: 菊地 2001)

図4 トゥブチャ集落の概略図 (1999年10月現在)

## 2-2. 遊牧の概略

牧村では、クランシップを背景に形成された集落 (*góob*) と家畜の放牧キャンプ (*fora*) を拠点として遊牧生活が営まれている。

レンディーレの牧村の大半は、コルヤカルギの町場近郊1～30キロメートルの間に形成されている。集落は3～4ヶ月に一度移動するが、その移動距離は1～2キロメートルである。集落とは別に放牧キャンプが設営されており、キャンプを拠点とした露天生活を行う牧人たちは、家畜とともに牧草と水をもとめて移動を繰り返している。

表3 トップチャ集落出身者の居住地別人口構成（1998年9月現在）

居住者	集落 (人)	放牧キャンプ (人)	町場 (人)	合計 (人)
少年	37	47	0	84 (31%)
少女	29	48	0	77 (28%)
婦人	60	0	0	60 (22%)
長老	32	3	5	40 (15%)
青年	0	12	0	12 (4%)
合計 (人)	158 [58%]	110 [40%]	5 [2%]	273 (100%) [100%]

トップチャ・クランの一集落の出身者全273人（1998年9月現在）を対象にその人口分散をみたところ、集落の居住者は158人（58%）、放牧キャンプの居住者は110人（40%）、そして残りの5人（2%）はナイロビで出稼ぎを行っていた（表3）。集落と放牧キャンプそれぞれの居住者をみると、基本的に、集落は既婚男女と幼児が家族生活を営む場であり、放牧キャンプは未婚の牧人が放牧活動を行う場であることがわかる。

長老は、集落内で自治活動を日常的に行っている。集落が移動したときには棘木の枝で家畜囲いを作ったり、儀礼の際に家畜を解体したり、家畜の給水や日帰り放牧を補助的に行ったりする。婦人は、水汲み、薪拾い、調理などの家事労働と育児を日常的に行う。その他にも、婦人は小屋を建てる役割を担っている。小屋は女性が結婚するごとに建てられる。牧村の小屋は、しなやかな木の幹と枝でできた骨組（高さ2メートル、奥ゆきと幅4メートル）に、野生サイザルの繊維を編んでつくられたムシロがかぶせられたドーム型のものである。解体には5～6時間、組み立てには7～8時間かかり、通常2～3人の既婚女性によって行われる（菊地2001：16）。解体が簡単にできるため、頻繁な移動が可能である。小屋の内部は、入口（*afáf*）からみて、調理をするための炉（*kindásse*）がある左半分が女性の空間（*ánkí oboórri*）、右半分は男性の空間（*ánkí méjel*）とされる（図5）。女性側には、調理用具や乳容器などが並べられている。男性側には家畜管理用具や武器などがある。両者を仕切る壁はない。

一方、放牧キャンプには小屋がない。放牧キャンプの主な担い手である未婚の男女は、露天生活を送る。家畜群は、未成熟固体群と成熟固体群の2つに分けられている。未婚の男女は、7歳頃から集落で未成熟固体の世話をはじめ、10歳頃から親元を離れて放牧キャンプに参加し、15歳頃で成熟固体をまかされると、その蓄群の放牧を担当している牧人の名で呼ばれるといったように一人前の牧人と見なされる（佐藤

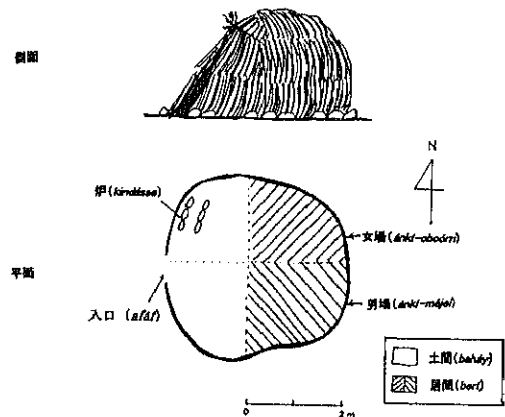


図5 牧村における小屋の見取り図

1986:160-161)。放牧キャンプの牧人は小屋のない生活を送る。結婚すると放牧キャンプから退いて集落に小屋を建てる。

放牧キャンプにはラクダ、ウシ、小家畜のキャンプがあり、それぞれ成熟個体群と未成熟個体群に分けて日帰り放牧される。ラクダは草本とシュラブを主な食物としているため、ラクダ・キャンプはブッシュランド・シケットや半砂漠草原が広がる標高400~1200メートル低地平原や山岳麓に設営される。集落と同様に、ラクダ・キャンプは同一クラン員を中心に形成される。そこでは、未婚男性の中でも、割礼を受けた青年がキャンプの設営と家畜の放牧管理を行い、割礼前の少年が日帰り放牧を担当する。彼らはラクダのミルクと血を主食としている。

イネ科草本類を主な主食とするウシのキャンプは、疎林草原やブッシュランド・シケットが600~1500メートルの山岳中腹部や山岳に設営される。ウシは2~3日おきに給水するため、キャンプは水場の近くにつくられる。ウシキャンプは複数のクランの放牧群で構成される傾向がある(孫2001:67)。ウシキャンプにおいても、青年が放牧管理を行い、少年が日帰り放牧する。そこでの牧人の主食はウシのミルクと血である。

レンディーレは、ヤギとヒツジの混合放牧を行っている。小家畜は草本類を主食としているため、乾季にこれらの植物が乏しくなると半砂漠草原から山岳部に移動する。移動の際、同一クランのラクダの母子集団やウシ蓄群に合流することがある。これは、小家畜だけではキャンプ構成員の食料となるべきミルクの生産量が不足するためである。ラクダやウシのキャンプでは、家畜は斃死肉以外食べられることはないが、ミルクが不足している小家畜のキャンプでは、小家畜を屠殺して肉を食べたり、小家畜の売却によって購入したトウモロコシを食べたりする。小家畜キャンプでは、主に青年や少年が放牧管理を行い、少年や少女が放牧を担当している。

ラクダ、ウシ、小家畜群は、大抵の場合、複数の世帯の協力関係に基づいて放牧・管理されている。複数の世帯が集まって形成された生計維持の単位をホームステッド(所帯)とよぶ(Sato 1980)。ホームステッドの規模は、平均16人が平均3.3戸の小屋を隣接させたものであるが、世帯規模、家畜群の規模、そして自然環境の季節変化によって変化する(Sato 1980:55-56)。ホームステッドの形成には、男系近親関係(同じ父系出自集団内でイトコまでを含む関係)、男系遠親関係(同じ父系出自集団内でイトコより遠い関係)、そして姻族関係が重視されている(Sato 1980:44)。

### 2-3. 年齢体系

家畜に依存したレンディーレの生業は、性と年齢による役割分担に基づいて行われている。生業における役割分担を体系付けるひとつの制度が年齢体系である。年齢体系は、年齢階梯(*weynaán*)と年齢組(*khólo*)から成る。年齢体系は、男性のみを直接的に組織化する制度である。

男性は、少年階梯(*īnam*)、青年階梯(*hér*)、長老階梯(*áram*)の3階梯に区分される(Sato 1998:208)。少年は青年階梯へと移行する際に割礼(*khándí*)を受け、青年は結婚によ

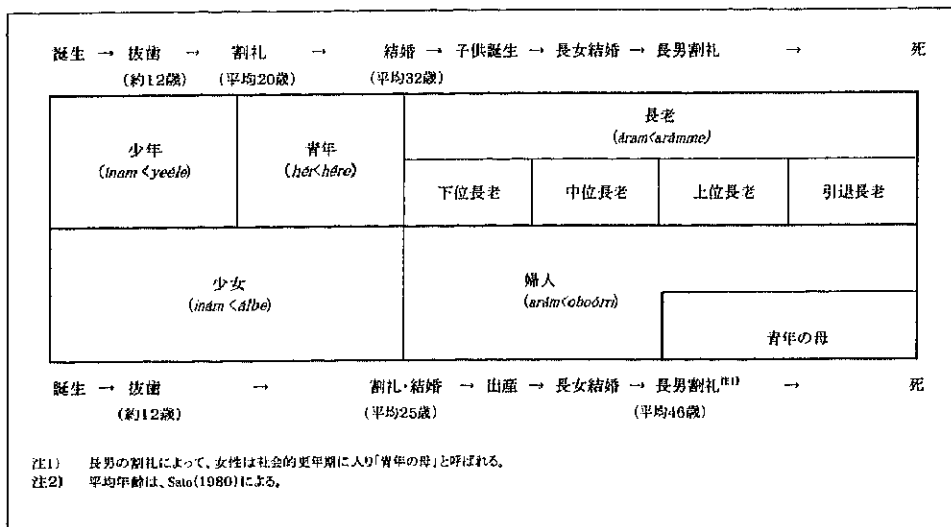


図6 レンディーレ社会における性・年齢階梯の分類とライフコース

って長老階梯へと移行する(図6)。女性の場合、少女(inám)と婦人(arám)に区分され、少女は結婚(mindí scho)によって婦人となる。通常、女性は結婚式の当日に割礼(khándí)される。婦人は長男の割礼によって社会的更年期に入り「青年の母」と呼ばれる。

長老階梯は、下位長老、中位長老、上位長老、引退長老といった4つの副階梯に細区分されている。男性の年齢階梯が細区分されているのは、男性の年齢階梯及び副階梯が、それぞれひとつの年齢組に対応しているからである。ひとつの年齢組は、14年ごとに行われる集団割礼式で少年たちが共に割礼を受け、年齢組命名式(gaalgurme)によって少年が青年階梯に移行することで形成される。青年は割礼式の11年後に開催される結婚開始式(nabo)から3年以内に結婚し、長老階梯へ移行した後も、新しい年齢組が形成されるごとに年齢組の一員として副階梯を移行する。1999年現在では、青年階梯にある年齢組はイモリ組(Imoli)、下位長老はイコロロ組(Ikororo)、中位長老はイキチリ組(Ikichili)、上位長老はイキマニキ組(Ikimaniki)、そして引退長老はイマウリ組(Imauri)となっている(表4)。年齢組は男性のみを対象に編

表4 レンディーレ社会の年齢体系(1999年現在)

年齢階梯	年齢副階梯	年齢組名	編成(年)	儀礼的結婚開始(年)
長老	引退長老	イマウリ	1937	1948
	上位長老	イキマニキ	1951	1962
	中位長老	イキチリ	1965	1976
	下位長老	イコロロ	1979	1990
青年		イモリ	1993	2004(予定)

注) 年齢組名は、日常使用されているサンプル名をあてている。

成される。女性の場合、結婚前の少女階梯では父の年齢組、結婚後の婦人階梯では夫の年齢組に準拠して、それぞれの所属と行動が決められる（佐藤 1992：55）。

年齢組への加入規則には3つある。第1の規則は、少年が生物学的適齢（経験的目安として12歳以上）にあること、第2の規則は、兄が弟と同時に早くに加入することである。第3の規則は、息子は父の所属する年齢組から3つ目以下の年齢組に加入することである<sup>4</sup>。例えば、イマウリ組の息子はイコロロ組以下の年齢組に加入する。但し、父の年齢組から2つ下の年齢組であっても、祖父の年齢組から6つ下の年齢組であれば、早めに年齢組に加入することができる（Sato 198：212）。例えば、イコロロ組の父を持つ息子の場合、祖父がイマウリ組に所属していれば、2007年に編成される年齢組に加入することが可能となる。年齢体系の規則にしたがうと、男性は、実年齢で12～30歳の間に割礼を受け、その11年後である23～40歳の間に結婚を開始する。例えば、1962年に結婚を開始したイキマニキ組男性が最短で長男を持つのは1963年であり、その長男が父の年齢組より3つ下のイモリ組の割礼式に加入する1996年には30歳になっている。

女性は、父の所属する年齢組の同輩と結婚することが禁止されている。通常、女性は父の年齢組から2つ下の年齢組に所属する青年と同時期に結婚を開始する。例えば、イマウリ組の娘はイキチリ組の男性が結婚し始める頃に、イキチリ組の青年と結婚したり、イキマニキ組やイマウリ組の既婚男性の後妻（*lamo*）として結婚したりする。つまり、女性は、同年代の男性よりも年齢組で言うと1つ上の年齢組に所属する男性が結婚しはじめる時期に結婚する。割礼・結婚を経ていない少女の出産は禁止されている。少女が妊娠すると、胎児の人口流産が行われたり、出産後の嬰兒殺しが行われたりする。

年齢体系は、放牧の担い手である未婚者の労働力を制度的に確保させる機能を果たすと同時に、世帯の発展を周期化させる。年齢体系とクラン体系によって、世帯の発展周期の異なる複数の世帯が父系出自の原理に基づいて協同し、遊牧において集団主義的な労働交換を行える仕組みが作りだされている。

#### 2-4. 人生儀礼と結婚

レンディーレ社会における男女それぞれの人生儀礼をみると、男性には家畜の放牧管理を行う役割が期待される一方で、女性には放牧活動を行う労働力を再生産する存在としての役割が期待されていることがわかる。本論では、人生儀礼のなかでも、男女の割礼と結婚儀礼につい

<sup>4</sup> レンディーレによると、年齢組には、長男の年齢組（*kholoti-teiyane*）、次男の年齢組（*kholoti-dehet*）、末子の年齢組（*kholoti-mande*）の3種類あり、これら3つの年齢組がひとつのまとまった年齢組層（これを世代組と呼ぶ）をなしているという（Sato 1998：211）。長男の年齢組は「テーリア（*teeria*）」の年齢組（最近では、イキチリ組がテーリアの年齢組にあたる）と呼ばれる。テーリアの年齢組を基準として、ひとつの年齢組層は42年間の時間幅をもつことになる。この考えにしたがうと、祖父、父、そして息子は同じカテゴリーの年齢組に所属する仕組み（父子連関の原理）になっている（Sato 1998：211）。

て記述し、その意味づけのちがいを述べる。

男性の場合、誕生後12歳ごろに受ける抜歯、割礼式、年齢組の命名式 (*gaalgurme*)、結婚開始式 (*nabo*)、ファハン (*fahan*: 呪詛の意味) の取得式<sup>5</sup>など一連の諸儀礼を行う。一方、女性が行う人生儀礼は、同じく12歳頃の抜歯 (これによって結婚可能な存在とされる) と割礼及び結婚式のみである。男女とも、抜歯を受けないこともあるが、割礼は必ず行う。女性の割礼は結婚式の一儀礼として行われる。男性は割礼を受けることによって家畜の放牧管理者となり、女性は割礼を受けると子供を持つことが社会的に認められる。

少年は、割礼式が行われる3年前に牡ヤギの供儀式 (*wahar-lagoraha*)、割礼式の前年に去勢ウシの踊り (*her-laduro*) と呼ばれる儀式を行う。割礼年 (最近では、1965年、1979年、1993年に行われた) になると、それぞれの集落で集団割礼式が行われる。割礼は、原則的にトゥブチャ・クランのボロ家の長老と彼らの許可を得たデーレ・サブクラン (トゥブチャ・クラン) の長老が行うことになっている。割礼を受ける少年は、あらかじめ腰持ち役の人 (*étf-dábar-khabo*) と足もち役の人 (*étf-luhló-khabo*) を選定し、割礼の際に付き添ってもらう (Sato 1998: 208)。

割礼式の翌年に、新しい年齢組の命名式が行われる。この儀式では、各クランを代表する新青年 (*étf-khosop*) と彼らの親が原野に集まって、環状の集落を形成する。各クランの代表者は、他の青年の模範として、青年に課された食事や性行動に関する規範をまもって行動することが期待される。新しい年齢組名が宣言されると、割礼を受けた少年たちは青年として認められる。それと同時に、新しい年齢組への加入が停止される<sup>6</sup>。

割礼年から11年目に、青年たちはラクダ群をつれて原野に集まり結婚開始式を行う。結婚開始式後3年以内に、青年たちはそれぞれ結婚式を行う。新郎になる男性は、出身クランの長老を代理人として、結婚の意図を新婦のクランの長老たちに申し出る。新婦側のクランに認められると、新郎と新婦の家族の間で結婚式の日取りや婚資 (*gúno*) の納付方法が決められる。婚資はラクダ (又はウシ) 8頭 (牝4頭と牡4頭) と小家畜8~13頭であり、これを新郎が新婦の近親者 (新婦の母の長兄、新婦の母、新婦の兄弟) に支払うことで正式な結婚が成立する。

<sup>5</sup> ファハン (呪詛) の取得式とは、テーリアの年齢組の長老が上位長老に移行し、テーリアの年齢組から2つ下の年齢組が青年階梯から下位長老に移行すると、上位、中位、下位長老すべての長老がトゥブチャ・クランのガラレ・リネージの集落に集まって行われる儀礼のことである。ファハン式は42年ごとに行われる。今回は、テーリアの年齢組であるイキチリ組の長老が上位長老に移行する2008年に行われる予定になっている。ファハン式では、ガラレ・リネージの長老が、若年の牝ヒツジ1頭を屠殺して、その獣脂を長老たちの額にぬる。そして、長老たちは細く切った供儀獣の皮紐を新しい杖にくくりつけると、長老たちはファハンの長老となる。ファハンの杖を持つ長老は、長老の呪詛を持つとされ、次のファハン式が行われるまで影響力をもつと考えられる。ファハンの制度によって、ファハンを持っている上位の年齢組層とファハンを持っていない下位の年齢組層が差異化される (Sato 1998: 210)。

<sup>6</sup> 特例が2つある。1つは、先に述べた年齢組への加入条件を逸脱しなければ、青年はひとつ上の年齢組に昇給できることである。2つめは、唯一青年であった同腹兄弟の長男が急死した場合、彼の弟が急遽割礼を受けて1つ上の年齢組に加入することである (Sato 1998: 210)。

新婦の母の長兄は2頭（牝1頭と牡1頭）、新婦の母は牡1頭、新婦の兄弟が5頭（牝3頭と牡2頭）を受納することになっている（佐藤1992：72）。結婚日には、最低でも3頭（牝2頭と牡1頭）のラクダ（又はウシ）を支払うことが義務づけられている。婚資の納付義務を怠って、駆け落ち結婚や押しかけ結婚を行うケースも見られるが、婚資が1頭も支払われなければ正式な結婚と見なされない。

結婚式は、新婦の出身集落で約10日間行われる。まず、早朝に新婦の割礼が行われる。その翌日に婚資が納付される。その後、新郎と新婦のための新しい小屋が建てられる。結婚式後も、夫婦は妻方居住を1～2年行う。夫婦は、妻が長子を出産した後に夫方の集落に移動することが望ましいとされる（佐藤1987：364）。

以上のように、男性は、家畜の放牧の担い手であった少年は割礼を受けて青年となると放牧キャンプの管理者となり、結婚を経て長老階梯に移行すると家畜の所有者となる。一方、女性は割礼を受け結婚することで、妊娠という生物的能力が社会的に認められてはじめて子供を持つことが可能となる。

## 2-5. 家畜の法的管理

家畜の相続には、生前分与と遺産相続がある。相続には男女によって差がある。というのも、女性にはもともと一生を通じて家畜の法的所有権がないからである。女性は、結婚の際に父（父が死亡している場合は長兄）から1頭の牝ラクダと1～2頭の駄用ラクダを持参財（*gúno*）としてもらう。これらは夫が管理し、長男が産まれて成長すると、この長男が管理する（佐藤1986：172）。父の遺産財としては、長女であれば牡ラクダが1頭、長女以外の娘は牝ヒツジを1頭ずつ相続するが、これも夫の管理下に置かれる。

男性の場合、相続に関して、長男と長男以外の場合でちがいが見られる。長男は遺産家畜の大部分を相続し、それ以外の息子は牝ラクダを1頭ずつもらう。長男以外の息子は、割礼や結婚のときに1～2頭のラクダを父から与えられる。父から長男以外の息子に分与されるのはそれだけである。父からの遺産家畜をあてにできない長男以外の息子は、婚資のための家畜を自力で用意しなければならない。レンディーレ社会では、厳格な長子相続が行われる（佐藤1986：172）。

遺産相続には、長男かどうかといった問題だけでなく、母が第1夫人か後妻かによってもちがいがあがる。一夫多妻婚世帯の場合、後妻（*lamo*）には、3～7頭の牝ラクダと1～7頭の牡ラクダを夫から生前分与されることになっている。父が生前分与しないで死亡した場合は、父が生前分与すべきであった家畜を第1夫人の長男が父の代わりに与える。後妻が死亡すると、彼女の長男が彼女に割り当てられていた家畜をすべて相続することになっている（Sato 1992：74）。

### 3. フラフラ開拓村の概略

#### 3-1. フラフラ村の開拓史

大旱魃にみまわれた1970年代はじめごろ、県都マルサビットの周辺にレンディーレ、アリアル、そしてサンプルが共同で開拓した定住村が形成されはじめた。開拓村に移動してきた人々の多くは、家畜を失ったりわずかししか持たなかったりしたために、農業や賃労などを求めて町場近郊へやって来た人々であった (Smith 1997: 32)。現在、マルサビット周辺にはこのような開拓村が7つある。カランティナ村、フラフラ村、イルキジジ村、カラレ村はカラレ地区に、ソング村、キトゥルニ村、ルパス村はソング地区に行政上区分されている (図7)。2つの地区の総人口は、1996年現在で9千人あまりであると言われている (Smith 1997: 69)。

ソング村の開拓は、家畜を失ったレンディーレとアリアルを率いたプロテスタント系キリスト教会A.I.C. (African Inland Church) の宣教師E.アンダーソンによってはじめられた (Smith 1997: 1, 87)。彼らの多くは、土地を獲得し農業をはじめた。移住人口が増え土地が不足するようになった結果、キトゥルニ村やルパス村が開拓された。ソング村を中心とした開拓がすすむにつれて、牧村から多数のレンディーレがマルサビットの周辺に小屋を建て始めた結果、幹線道路にも開拓村が形成されはじめた。調査地フラフラ村は、そのうちのひとつである。

フラフラ村は、1971年にパイオニア精神にあふれた長老A (ウイヤム・クラン所属、年齢組：イマウリ組、1999年現在で引退長老) が、フラフラ村周辺に小屋を建てたことがきっかけとなって形成された。長老Aは、もともとマルサビットから約50km離れた幹線道路上の町ロゴゴで肉屋を経営していた。ロゴゴには、マルサビットからトウモロコシやマメなどの農産物がソマリ商人によって運ばれていた。当時、トウモロコシ1サック (麻袋90kg) は、去勢ウシ1頭と交換されていたという。

Committee wehe ugarta "heero kaldai lagato, into akatamit?" worsade. Meheidahaya, idahaya, "Haldayan fuulda."

「去勢ウシ1頭と交換されているもの (1サックのトウモロコシ) は、一体どこから運ばれてきているのか」と、(ロゴゴの) 委員会に尋ねた (答えがマルサビットであ

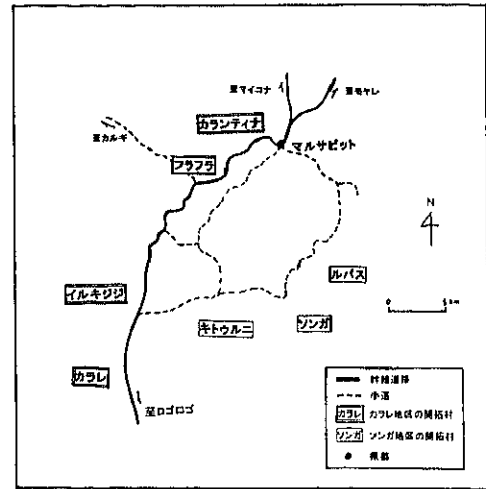


図7 マルサビット周辺のレンディーレの開拓村



るのは明らかであった)。そいつらに言ってやった、「わしはマルサビットに移住するぞ」と（インタビューより抜粋）。

まず、長老Aは農耕が可能なソング村に妻2人と子供たちを連れて移住し土地を獲得した。しかし、ソング村ではボラナとレンディーレの争いが絶えなかったという。そこで、長老Aは、レンディーレ固有の村を開拓する目的で、現在のフラフラ村周辺に小屋を建てはじめた。

Goorat, dot Songa ichow Kituruni Anderson fuule. Haldayan gaas lama akhaba, akhabanni. Gaso Anderson akhate, gas addan inno akhanno.

昔、ソングとキトゥルニの人々はアンダーソンによって連れてこられた。マルサビットにはふたつの角がある。ひとつ（ソング）はアンダーソンがとった。残りの角（フラフラ）は我々（レンディーレ）がとろうではないか（インタビューより抜粋）。

長老Aに続いて、ガルディーラン・クランのアディチャレの家族、サレ・クランのナボスの家族が入植した。彼らの多くは、イスラム教徒に改宗していたと言う。当時の開拓者たちによると、フラフラ村は、ソング村のようにある特定のクランが中心となって開拓されはじめたのではなく、イスラム教徒としての結束によって成立したのだ、と言う。

### 3-2. 居住形態

フラフラ村には、牧村とちがって、儀礼や寄合のための礼拝場 (*nabo*) がない。宗教儀礼の場としては、キリスト教の教会（プロテスタント系聖パトリック教会とカトリック教会）とイスラム教のモスクが1つある（図8）。寄合は、教会、モスク、そして木の下などで行われる。キリスト教の教会は、それぞれ読み書きを教える保育園の施設を持っている。その他に、公立の小学校が1つある。

フラフラ村の小屋は、牧村と同様に、母子を単位として建てられており、一夫多妻婚の妻たちはそれぞれ小屋を構えている。小屋の形には3つあり、ひとつは牧村のものと同じである（図5）。しかし、牧村と同じタイプ的小屋は、フラフラ村では寝室のある小屋から独立させた台所として使用される場合が多い。台所は、調理のみならず、ミルクなど食料の分配が行われる女性固有の空間である。この空間には、青年が人目を避けて食事をすることはあっても、長老が入ることはない。フラフラ村で一番多く見られる小屋は、円形的小屋である（図9）。この小屋は、エジェル (*Olea europaea*: オリーブ科) と呼ばれる木を環状に立てかけた壁の表面に牛糞と土を混ぜあわせた泥を塗り固められたものである。木が不足している場合は、石と針金を組み合わせることもある。屋根は、円錐形になるように組まれた枝の上にワラが編み込まれてつくられたものである。小屋の内部は、牧村と同じく、居間を背にして入口を望んだ場合、右半分が女性の空間 (*ánkí-oboérrí*)、左半分が男性の空間 (*ánkí-mójeŋ*) である。牧村の小屋とはちがって、フラフラ村の小屋には土間と居間を仕切った壁がつくられる。客は居間まで入ることはなく、土間でもてなされる。

フラフラ村で見られる3つめのタイプ的小屋は、長方形的小屋である（図10）。長方形の小

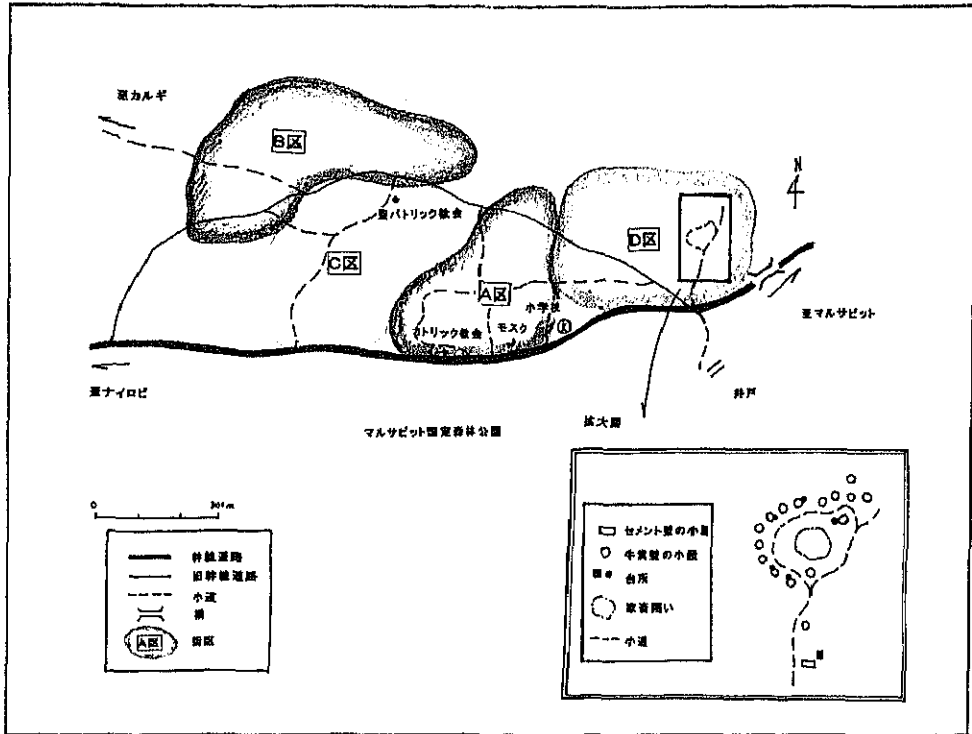


図8 フラフラ村

屋の壁は、円形と同じく牛糞と土の混ざった泥で作られる場合と、セメントで固められる場合とがある。長方形の小屋の屋根には、アルミ製のシートが敷かれる。その場合、小屋の壁は、円柱ではなく四角柱型に建てられる。また、コンクリートでできた水タンクを屋根に隣接させ、雨水を生活用水として使用する工夫が凝らされることもある。長方形の小屋の内部も、土間と居間が壁で仕切られているが、居間の中で女性の空間と男性の空間は明示されていない。また、土間には炉がなく、小屋の外に牧村の小屋と同じ者が台所として建てられる。台所は女性の空間である。

フラフラ村の小屋の出入り口は、牧村と同様、すべて西側に面している。牧村の小屋は半日で組み立てられるが、フラフラ村の小屋は1週間から数ヶ月かけて建てられる。家主が移住す

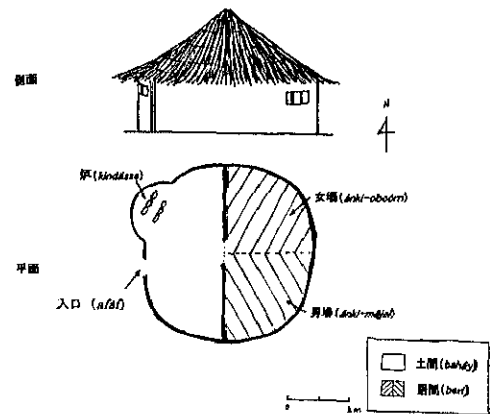


図9 フラフラ村における円形の小屋の見取り図

る場合には、小屋が解体されることはなく、次の居住者に売却される。

フラフラ村では、牧村のように小屋が男系出自序列にのっとって環状に配置されるのではなく、異なるクランの小屋が混在して建てられている。しかしながら、クランのまとまりを居住形態に見出すことができる。フラフラ村の住民は、村を4つの街区に大別しており（図8）、各街区には特定のクランの小屋が集中する傾向が見られる（表5）。例えば、村の中心地であるA街区は開拓者のリネージ名から「ガルマガルの村（*gob Galmagar*）」と呼ばれ、サレ・クランとウイヤム・クランが集中している。B街区は「西側（*bahai*）」と呼ばれ、村の開拓者の出身であるウイヤム・クランが集中している。C街区は「デュプサイの村（*gob Dupsay*）」デュプサイ・クランが集中している。D街区は「ガルディーランの村（*gob Galdeilan*）」と呼ばれ、サレ・クランと初期入植者であるガルディーラン・クランが集中している。

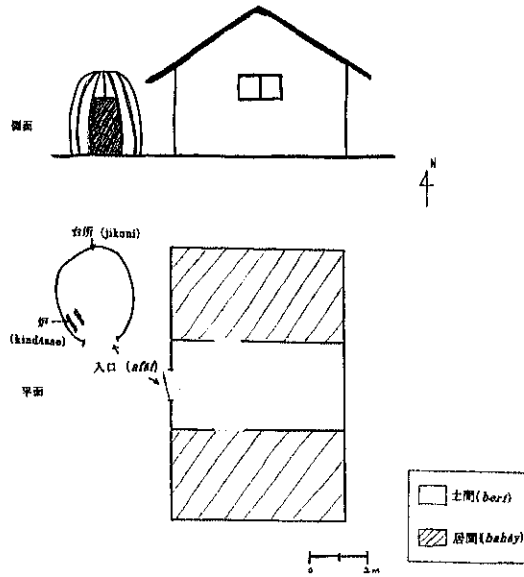


図10 フラフラ村における長方形の小屋の見取り図

表5 フラフラ村の各街区における小屋数とクラン（1999年12月現在）

クラン名	A街区	B街区	C街区	D街区	合計(小屋数)
サレ	30	20	11	18	79 (26%)
デュプサイ	10	12	28	5	55 (18%)
ウイヤム	20	29	3	1	53 (18%)
ガルディレン	10	6	7	17	40 (13%)
レングモ	10	6	6	2	24 (8%)
ナハガン	2	7	4	3	16 (5%)
トゥプチャ	7	1	3	0	11 (4%)
ウルウェン	8	1	0	2	11 (4%)
オドラ	1	1	0	4	6 (2%)
マタルバ	0	2	3	0	5 (1%)
その他	1	0	1	0	2 (1%)
合計(小屋数)	99	85	66	52	302 (100%)
[%]	[33%]	[28%]	[22%]	[17%]	[100%]

注) その他には、ガブラ族とボラナ族が一括されている。

### 3-3. 人口と世帯

1999年12月現在、フラフラ村の人口は1,350人（男性651人、女性699人）であった。世帯は278世帯であることから、1世帯あたり平均4.9人が含まれることになる。牧村のトッブチ58世帯）における割合をみると、1世帯あたり平均4.7人であることから、世帯規模は牧村よりやや大きめであると言える。

フラフラ村の人口分散を年齢階梯別にみた（表6）。人口は、集落、放牧キャンプ、ナイロビなどの町場に分散していた。牧村と比較すると、フラフラ村の場合、集落到に居住している割合が74%とより高く、定住化の傾向が強まっていることがわかる。また、出稼ぎなどで町場に居住している割合も、わずか2%である牧村と比べてフラフラ村では11%といったように、高くなっている。人口の15%を占める放牧キャンプの居住者をみると、牧村と同様に、少年、少女、青年といった未婚者で多数が占められている。フラフラ村における集落への人口集中化は、牧村で放牧の担い手となるはずの未婚者が、フラフラ村では学校に通学するために集落到に居住する割合が高くなっていることが指摘できる。フラフラ村の未婚者854人（男性405人、女性404人）中、集落内で学校教育を受けていたのが229人（男性132人、女性97人）、集落外で学校教育を受けていたのが79人（男性57人、女性22人）であり、就学率は36%であった。牧村では、未婚者172人（男性88人、女性84人）中、就学者は8人（男性5人、女性3人）で、就学率はわずか5%であった。フラフラ村の就学率は牧村と比較すると高くなっていた。

次に、フラフラ村の世帯を構成する既婚男女の出身地と世帯主の所属する年齢組に着目することで、牧村からの移住状況を見る。まず、夫婦の出身地の組み合わせによって、フラフラ村の世帯を4つに分類した（表7）。4つの分類は、それぞれ、夫婦ともに牧村の出身者である世帯、牧村出身者である夫が開拓村出身の妻と結婚した世帯、夫婦とも開拓村出身者である世帯、開拓村出身者である夫が牧村出身の妻と結婚した世帯である。表7から、フラフラ村の世帯の64%が夫婦ともに牧村の出身者である世帯（175世帯）で占められていた。夫婦ともに牧村出身者である175世帯を世帯主の所属する年齢組別にみたところ、イキチリ組の72世帯（イキチリ組全世帯の77%）をピークにして、イコロロ組の27世帯（イコロロ組全世帯の38%）、イモリ組で2世帯（イモリ組全世帯の6%）といったように、年齢組が若くなるごとに夫婦と

表6 フラフラ村出身者の居住地別人口構成（1998年9月現在）

居住者	集落（人）	放牧キャンプ（人）	町場（人）	合計（人）
少女	316	66	22	404（30%）
少年	251	98	17	366（27%）
婦人	282	1	12	295（22%）
長老	112	8	48	168（12%）
青年	40	30	47	117（9%）
合計（人）	1001 〔74%〕	203 〔15%〕	146 〔11%〕	1350（100%） 〔100%〕

表7 フラフラ村の世帯における夫婦の出身地と世帯主の年齢組（1999年12月現在）

世帯主の 年齢組名	儀礼的 結婚開始年	世帯を構成する夫婦の出身地				合計 (世帯数)
		夫：牧村 妻：牧村	夫：牧村 妻：開拓村	夫：開拓村 妻：開拓村	夫：開拓村 妻：牧村	
デフグド	1920	1(1) [100%]	0(0) [0%]	0(0) [0%]	0(0) [0%]	1(1) [100%]
イキレク	1934	15(15) [100%]	0(0) [0%]	0(0) [0%]	0(0) [0%]	15(15) [100%]
イマウリ	1948	20(17) [91%]	2(2) [9%]	0(0) [0%]	0(0) [0%]	22(19) [100%]
イキマニキ	1962	38(16) [93%]	3(1) [7%]	0(0) [0%]	0(0) [0%]	41(17) [100%]
イキチリ	1976	72(12) [77%]	18(4) [19%]	1(0) [1%]	2(0) [2%]	93(16) [100%]
イコロロ	1990	27(1) [38%]	25(2) [37%]	7(1) [10%]	9(0) [13%]	68(4) [100%]
イモリ	2004	2(0) [6%]	11(0) [33%]	14(0) [42%]	6(0) [18%]	33(0) [100%]
合計(世帯数)		175(62) [64%]	59(9) [22%]	22(1) [8%]	17(0) [6%]	273(72) [100%]

注1) レンディーレは独自の年齢組名を持っているが、日常用語としてはサンプル語の年齢組名を使用している。従って、本論ではレンディーレ名のデフグド組以外は全てサンプル名をあてている。

注2) ( ) は内数で夫が死亡している世帯の数を示す。

注3) 離婚世帯(5世帯)は含まれていない。離婚世帯の5人の女性のうち、4人がフラフラ村出身者で1人が牧村出身者であった。

注4) 一夫多妻婚世帯の場合は、フラフラ村に居住する妻で先に結婚した方の妻の出身地を示している。

注5) 儀礼的結婚開始式は、青年が割礼式の年から11年目にあたる年を示す。実際は、儀礼的結婚開始年を基準に、その前後に結婚している。

もに牧村出身者である世帯数は減少している。

年齢組別の割合をみると、デフグド組、イキレク組、イマウリ組、イキマニキ組、イキチリ組では、夫婦ともに牧村出身者である世帯の割合が、それぞれ100%、100%、91%、93%、77%と一番高い割合を示している。しかし、イコロロ組では、夫婦ともに牧村出身者である世帯(27世帯：38%)に次いで、夫が牧村出身者であり開拓村出身の妻と結婚している世帯(25世帯：37%)の割合が高くなっている。さらに、イモリ組では、夫婦ともに牧村の出身者である世帯(2世帯：6%)の割合が一番低く、代わって夫婦ともに開拓村の出身者である世帯(14世帯：42%)が一番高くなっていた。このことから、牧村からの移住世帯は減少する傾向にあり、開拓村出身者で構成される世帯が増加しつつあると言える。

フラフラ村の世帯について、世帯を構成する夫婦の婚姻の有無、婚姻後の婚姻状況、婚姻の形態、そして世帯主となる夫が生存しているかどうかによって7つに分類した。それらは、単婚完全世帯、単婚寡婦世帯、単婚父子世帯、一夫多妻婚完全世帯、一夫多妻婚寡婦世帯、離婚

世帯、未婚世帯である。表から、フラフラ村には、単婚完全世帯が126世帯（45.3%）と最も多く、次いで一夫多妻婚完全世帯が74世帯（26.6%）、一夫多妻婚寡婦世帯が40世帯（14.4%）、単婚寡婦世帯が32世帯（11.5%）、離婚世帯が4世帯（1.4%）、単婚父子世帯と未婚世帯がそれぞれ1世帯（0.4%）であった。

### 3-4. 生計の多角化

#### 3-4-1. 生業活動：牧畜と農業

フラフラ村では、ウシと小家畜を中心とした牧畜と農業が行われている。

フラフラ村における牧畜は、草と水をもとめた遊牧と、家畜そのものとミルクの販売を目的にした商業牧畜の2つに分けられる。前者の場合、マルサビット山上で放牧されたり、村から100キロメートルあまり離れたクラール山などで放牧されたりしている。この場合、放牧管理を行っているのは青年であり、日帰り放牧を行うのは少年である。これは、牧村におけるウシと小家畜キャンプと同様である。

後者の場合は、フラフラ村から30キロメートル内に設営されており、その範囲内を定期的に移動している。家畜そのものの販売に使用されるのは、ウシと小家畜であるが、ミルク販売に使用されるのはウシのミルクのみであり、小家畜のミルクは使用されない。小家畜のミルクは販売されず、村と放牧キャンプで自家消費される。そのため、小家畜群は通常放牧キャンプと集落に分けて放牧される。一方、販売用ミルクを提供する泌乳中の牝ウシは、泌乳量の増える雨季に限って、キャンプとフラフラ村内とに分けて放牧される。基本的に、村にすべての畜群が収容されることはない。フラフラ村に収容されるウシと小家畜は、主に少年や少女によって放牧される。放牧キャンプでは、少年と青年によって日帰り放牧が行われている。少年と青年のほかに、ウシキャンプに合流して小家畜の放牧を担当している少女、食料品とミルクを運搬する少女や婦人、青年の放牧管理を補助する長老が頻繁に訪問する。

フラフラ村近郊でウシと小家畜の放牧を行っている牧人は、畜産物だけで食料をまかなえない。というのは、畜産物であるウシのミルクは、自家消費されるのではなく、販売用に使用されるからである。ウシキャンプと小家畜キャンプが合流している場合、牧人にはヤギのミルクと農産物が食料品として調達される。ウシキャンプが小家畜キャンプと合流していない場合は、ウシのミルクが消費されるが、牧人の主食は基本的に農産物である。牧人は、朝はミルクティを飲み、夜はウガリ（トウモロコシの粉を熱湯で溶いたもの）にミルクをかけたものを食べる。牧人の食料をキャンプに調達するのは女性であり、女性はキャンプからミルクを集落や町場へ運ぶ役割も兼ねている。村や町場から、トウモロコシ、マメ、砂糖、紅茶などの食料品が必要に応じて補給されている。

牧人の食料である農産物の大半は、現金で購入されたものであり、フラフラ村で栽培されたものではない。フラフラ村における農業は、年2回の雨季（4月～6月、11月～12月）を利用した天水農業である。ソング村のように灌漑施設が完備されていないため、農産物は自家消費

用のマメとトウモロコシ栽培にとどまっている<sup>7</sup>。収穫は1月と6月であるが、収穫物は1～2ヶ月の間に自家消費される。調査期間の1998年と1999年の小雨季（11月～12月）、フラフラ村でトウモロコシの収穫はなく、マメのみが収穫された。収穫されたマメは、約1ヶ月で自家消費された。自家消費用の農産物が不足すると、援助物資や町場で購入したものを食べる。雨季のみ農業が行われているフラフラ村では、雨が降り出した時点で集落に残っている者が協力して作業を行う。それには、幼児を除いた全ての人々（長老、婦人、青年、少年、少女）があてはまる。

### 3-4-2. 現金収入：賃労と商業

農業生産の不安定なフラフラ村では、世帯の一部がウシと小家畜を中心とした牧畜と畜産物であるミルクの販売を行いつつ、別の一部が出稼ぎなど賃労を行っている。つまり、賃労と牧畜のふたつを主軸にした生計活動が行われている。

賃労には、主に長老と学校教育を受けた青年が従事している。賃労の内容は、ナイロビなどの町場での夜警、政府機関や開発団体でのオフィスワーク、学校の教師などがある。商業では、ウシと小家畜の仲介商人、生活必需品などの小売店経営、薪販売などである。フラフラ村の男性（長老と青年）が行っていた主な生業活動を年齢階梯別にみた（表8）。賃労と商売に従事する者が158人（55%）と最も多く、この傾向は年齢組が若くなるにつれて顕著になっている。一方、牧畜セクターの主力をなしているのは依然として青年階梯にあるイモリ組であり、46人と最も多い。しかし、牧畜セクターに従事する者の割合は、中位長老階梯にあるイキチリ組の52%をピークに、下位長老階梯のイコロロ組では20%、青年階梯のイモリ組では39%と、年齢組が若くなるにつれて小さくなっている。

現金収入は男性による賃労と商業ばかりではない。フラフラ村には、商業活動を行っている女性がいる。女性たちは、畜産物であるミルク、家畜の皮、薪、ミラ（*Catha edulis*：ニシキギ科：覚醒効果があって主に男性が好んでしがんでいる）、チャンガ（トウモロコシを使用した蒸留酒）、ビールなどを集落内やマルサビットの町場で販売している。その他に、キオスクにおける生活必需品の販売が女性によって集落内で行われている。1999年12月現在、フラフラ村では、既婚女性295人のうち102人（35%）が商業活動を行っていた。その内訳としては、ミ14人（5%）、チャンガとミラの販売が13人（4%）、キオスクの経営が5人（2%）であった。女性の商業活動の中では、ミルク販売が最も盛んに行われていることが分かる。

<sup>7</sup> 灌漑施設が整備されたソング地区では、農業が発達している。そこでは、トウモロコシやマメのほかに、パパイヤ、マンゴ、オレンジ、バナナなどの果物、ジャガイモ、キャベツ、トマト、タマネギ、スクマウィキなどの野菜が、1年を通して自家消費用のみならず換金用に生産されている。ソング地区への移住者たちは、家畜を飼養しつつも、農業を主体とした生業を行うために牧村から土地を求めて移住してきたレンディーレである。

表8 フラフラ村の男性の主な生計活動と年齢階梯（1999年12月）

年齢組	(実年齢幅)	無 職	牧 畜	賃労と商売	合計 (人)
イマウリ	(74～92歳)	3 〔100%〕	0 〔0%〕	0 〔0%〕	3 〔100%〕
イキマニキ	(60～78歳)	6 〔25%〕	12 〔50%〕	6 〔25%〕	24 〔100%〕
イキチリ	(46～64歳)	6 〔8%〕	40 〔52%〕	31 〔40%〕	77 〔100%〕
イコロロ	(32～50歳)	1 〔2%〕	13 〔20%〕	50 〔78%〕	64 〔100%〕
イモリ	(18～36歳)	0 〔0%〕	46 〔39%〕	71 〔61%〕	117 〔100%〕
合計 (人)		16 〔6%〕	111 〔39%〕	158 〔55%〕	285 〔100%〕

注1) 青年であるイモリ組の男性のみ未婚者を含んでいる。

注2) 牧畜は、家畜の放牧のみならず管理も含む。

注3) 農業を除外しているのは、専門的に農業のみを行っている者がいないためである。

注4) それぞれの年齢組の年齢階梯は、引退長老階梯がイマウリ組、上位長老階梯がイキマニキ組、中位長老階梯がイキチリ組、下位長老階梯がイコロロ組、青年階梯がイモリ組である。

#### 4. フラフラ村におけるミルク販売

##### 4-1. ミルクと食料品の流通

フラフラ村の人々によるミルク販売には、ウシの放牧キャンプ、フラフラ村、そしてマルサビットの町場といった3つの活動場所がある。これら3つの活動場所の間でミルクと食料品が運搬されている（図11）。ミルクは、ウシキャンプからフラフラ村経由でマルサビットへ運搬される場合、ウシキャンプから直接マルサビットへ運搬される場合、そして、フラフラ村の家畜囲いのウシ群からマルサビットへ運搬される場合がある。ミルクをウシキャンプからフラフラ村に運搬する場合をのぞいて、ミルクの運搬は女性のみが行っている。つまり、男性は町場にミルクを運搬することはない。

一方、食料品は、マルサビットからフラフラ村経由でウシキャンプへ運搬される場合、マルサビットからフラフラ村へ運搬される場合、そして、マルサビットから直接

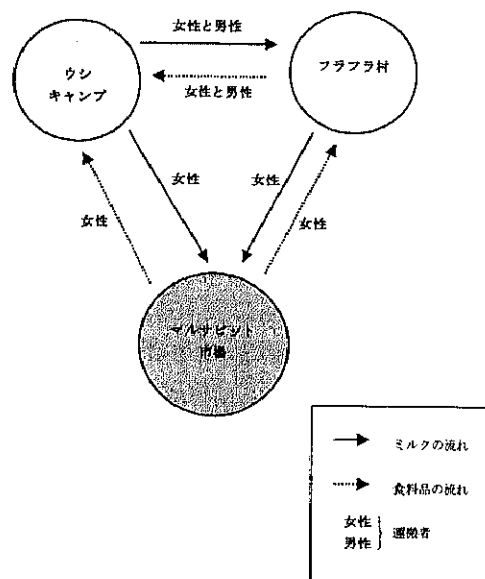


図11 ミルクと食料品の流れ



ウシキャンプに運搬される場合がある。この場合も、フラフラ村からウシキャンプに運搬する場合をのぞいて、男性がマルサビットから食料品を運搬することはない。男性ではなく女性がミルクを販売し、その利益で食料品を購入する役割を担っているのは、食料であるミルクを分配する役目を伝統的に担っているのが女性であったからと考えられる。

ミルクと食料品の運搬者である女性は、午後5時ごろまでに食料品を持ってウシキャンプへ向かい、そこでウシを搾乳し、牧人のために夕食を準備した後、一晚キャンプで過ごす。翌朝6時ごろ、再びウシを搾乳する。ミルクが不足している場合、前夜のミルクと早朝のミルクを混ぜて村に持ち帰ることもあるが、基本的に前夜のミルクは自家消費され、早朝搾乳されたミルクが販売用に使用される。ウシキャンプからフラフラ村に持ち帰られたミルクは、村で搾乳されたミルクといっしょにされて自家消費と販売用に分けられる。

自家消費用のミルクは、1日1世帯あたり200mlカップで2～3カップ程度であり、主としてミルクティに使用される。一方、販売用のミルクは、プラスチック製の規定カップ(150ml)で計られた後、ミルクの所有者本人によって販売されたり、他の販売者に託されたりする。後者の場合、委託者は、委託したミルクの量がカップで何杯分に相当するかを確認する。ミルクの販売者は、半カップ多めにミルクを準備する。というのも、購買者が鮮度をみるための味見を要求するからである。ミルクを多めに持参するのは、それだけの理由ではない。販売者は、ミルクの売場に着くと、まず販売を行う場所に座り込み、少量のミルクを地面にたらしめて祈るからである<sup>8</sup>。

ミルクの価格は、各販売者と客との個人的な交渉によって決められるのではない。毎朝ミルク市場に集まった販売者たちが仲間うちで決定する。訪問販売の場合も、市場での価格が適応される。常連客へのサービスは、何カップか多めに分け与えられるだけであり、販売者は決定された価格を厳守して販売する。販売する際に、規定カップの上部分をカットして、できるだけ多くの利益を得ようとする女性がいるが、このように細工されたカップで販売していることが知れると、他のミルク販売者から非難をあげる。

町場におけるミルクの販売方法には2つある。ひとつは、特定の購買者を対象にした訪問販売である。特定の購買者は、常連客であったり、知人であったりする。この場合の支払いは、即時に行われることもあるが、通常、月決め契約などの掛売りである。ふたつ目の販売方法は、ミルク売場で不特定の購買者を対象にした販売である。この場合の支払いは、すべて即時に行われる。この2つの販売方法によって、ミルクの販売者は持参したミルクを必ず完売しつくすことが大前提となっている。

できるだけ新鮮なミルクを完売するために、販売者たちは工夫をこらしている。販売に使用されるミルクの乳酸発酵を抑制するために、あらかじめ燻煙消毒 (*hajit*) されている乳容器

<sup>8</sup> この行為は、不特定多数の客にミルクを売る場所で行われる。常連客などの訪問販売では行われ  
ない。

(*kíuɫsoróor*) が使用されている。そのような乳容器に収まりきらないミルクはプラスチック製の容器に入れられ、それを布で包み隠したものを背負って販売者は町場へと向かう。町場に着くと、木製の乳容器に入ったミルクを先に販売し、プラスチック製の容器に入れたミルクを木製の乳容器に移し替えて売ろうとする。プラスチック製の容器しか持ち合わせていない販売者は、ミルクのカップ数を確認した後、他の販売者が所有する木製の乳容器の中にミルクを入れかえて販売を依頼する。販売者は、売れ行きが悪い場合、常連客や顔見知りの客に販売する際に1カップ多めに渡すことで、品質が悪くなったり、売れ残ったりする事態を回避する。午後3時までにはミルクが完売できないと、販売者は密かにミルクの価格を下げたり、知人の家に訪問販売したりして完売しようとする。販売時間が制約されているのは、ミルクの鮮度が落ちて売り物にならなくなるからである。

レンディーレ以外の民族が多数居住する町場の住民に人脈をつくっておく、ということも販売を有利にするための対策である。親戚が町場の住民と婚姻関係を結んでいれば、挨拶を兼ねて自宅まで訪問し、近所の人々に声をかけることができる。その際、東アフリカの共通言語であるスワヒリ語のみならず、マルサビットの町場の住民が使用しているボラナ語やソマリ語を話すことも大きなメリットになる。

また、2～3カップといった少量のミルクを販売する女性は、大量のミルクを販売している女性に販売してもらおう代わりに、食料品などの買出しを彼女のために代行したりする。ミルクの販売者たちは、キャンプと村用の食料品を町場で購入する役割も担っているが、このような共同作業によって、ミルクの販売と食料品の購入に費やす時間が短縮される。

販売者は、午後4時ごろまでに売上金と購入した食料品を村へ持ち帰る。販売者が帰宅すると、委託者は売上金と依頼した食料品を受け取る。食料品は、村用とウシキャンプ用に分けられる。ウシキャンプ用の食料品は、ミルクをキャンプから運んできた運搬者に託して、その日のうちにウシキャンプへ運搬される。

ウシキャンプ、フラフラ村、そして町場からなる生活環のなかで、ミルクの運搬や販売を担当する女性たちは重要な役割を果たしている。世帯内の女性労働力が不足しているといった理由から、この一連の作業を1人で行う女性がいる。その場合、キャンプは町場から1日で往復可能な距離に設置されなくてはならなくなる。この制約を取り除く解決策として、ミルクの受託販売を専門的に行う女性の労働力が必要となる。

#### 4-2. ミルクの販売者

フラフラ村でミルク販売を行っていた女性71人を対象に、それぞれミルクを提供していたウシの収容場所とウシ群の所有者について調べた(表9)。調査を行った1999年12月は雨季の終わり頃で、ウシはキャンプのみならずフラフラ村内にある家畜囲いにも収容されていた。ウシキャンプからミルクを入手し販売していたのが59人(83%)、村内の家畜囲いから搾乳したミルクを販売していたのが12人(17%)であった。つまり、販売者の8割あまりが、販売用のミルク

表9 販売者が入手したミルクの供給場所と所有者 (1999年12月)

ウシ群の所有者	ウシの収容場所		総計 (人)
	ウシキャンプ	集落	
世帯内:			
夫	33	7	40 (56%)
息子	11	1	12 (17%)
小計(人)	44	8	52 (73%)
世帯外:			
父	11	1	12 (17%)
その他	4	3	7 (10%)
小計(人)	15	4	19 (27%)
総計(人)	59	12	71 (100%)
[%]	[83%]	[17%]	[100%]

注) その他は、夫、息子、そして父以外の男性所有者を示す。

クをウシキャンプから入手していたことになる。

次に、それぞれのウシ群の所有者をみると、夫や未婚の長男といった同一世帯員であったのが52人(73%)、実家の父、又はその他(同一クラン員や近隣居住者など)といった世帯外の者であったのが19人(27%)いた。販売者たちは、世帯内の男性が所有する牝ウシのミルクを販売用に使用する傾向があると言える。

以上をまとめると、販売者には4タイプあると言える。第1は、世帯内でミルクを自給し自ら販売する場合、第2は、世帯内でミルクを自給し他の販売者に委託する場合、第3は、世帯内でミルクを自給しないで世帯外の者から与えられたミルクを自ら販売する場合、そして、第4は、世帯外のミルクを受託販売することでその報酬を得る場合である。第4の場合、その報酬は現金で与えられるのではなく、受託販売用のミルクの2~3割ほどが報酬ミルクとして与えられる。販売者は、報酬ミルクを自家消費するのではなく売却する。つまり、ミルク販売の委託者と受託者の間には、直接的な現金でのやりとりではなく、ミルクを介したやりとりが行われているのだ。

図12は、ミルク販売に関わる人間関係を示したものである。ミルクの所有者である女性は、放牧キャンプで泌乳ウシを管理している男性から直接又は間接的にミルクを受け取る。その後、自ら常連の購買者や不特定多数の購買者にミルクを販売する場合と、ミルク販売者に販売を委託する場合とがある。販売者は、自分でミルクを販売することもあれば、市場で別の販売者に販売を委託することもある。前者の場合、常連客と不特定多数の客に販売するが、後者の場合、常連客に販売されるのではなく、不特定多数の客のみに販売されている。一方、現金は常連客と不特定多数の客から彼らにミルクを直接販売した者を介して支払われ、最終的にミルクの所有者のところへ渡る。購買者から家畜の管理者へ直接現金が支払われることはない。しかし、家畜の管理者である男性が、ミルクの所有者を介さないで、販売者に直接交渉して利益を得るというケースがみられた。これは、家畜の管理者である夫とミルクの所有者である彼の妻との

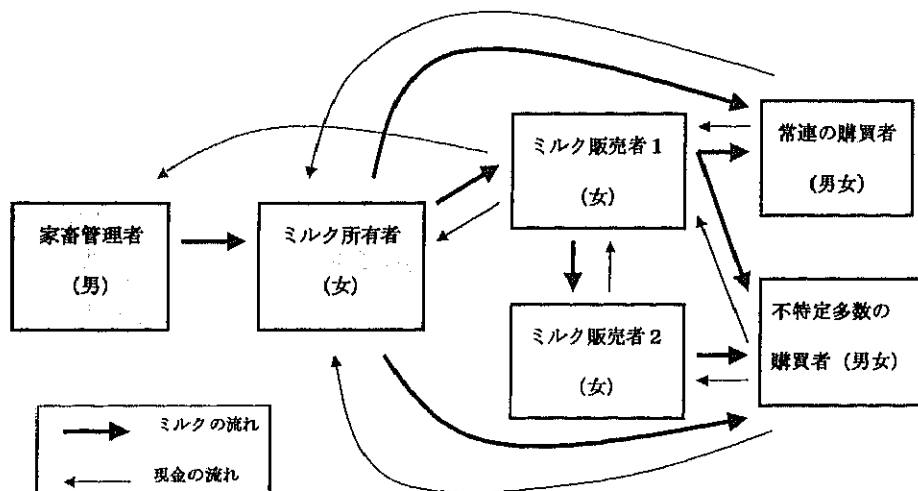


図12 ミルク販売に関わる人間関係

表10 ミルク販売者の世帯主が行っていた主な生計活動と年齢階梯 (1999年12月現在)

世帯主の年齢組	年齢階梯	牧畜	賃労・商売	無職	合計(人)
イマウリ	引退長老	0	0 (0)	1	1
イキマニキ	上位長老	3	1 (0)	1	5
イキチリ	中位長老	21	4 (1)	3	28
イコロロ	下位長老	3	8 (4)	1	12
イモリ	青年	10	2 (0)	0	12
	合計(人)	37	15 (5)	6	58
	[%]	[64%]	[26%]	[10%]	[100%]

注) ( ) は、内数で出稼ぎを行っていてフラフラ村に不在である数を示す。

間でみられた例である。この例については、後ほど詳しく述べる。

ミルクの販売を専門的に行っている女性たちの夫は、どのような生計活動を行っているのか。販売者女性71人それぞれの夫をみると、11人の夫が死亡しており、1人が離婚していた。そこで、残り59人の女性の夫(58人)の生計活動と年齢階梯をみた(表10)。夫が牧畜セクターに従事している者が37人(64%)と最も多く、そのうちで夫が中位長老である場合が21人と最も多いことがわかった。つまり、ミルク販売を行っている女性の夫は、牧畜セクターに従事している傾向が高いということが言える。また、夫が賃労や商売を行っている15人のうち、フラフラ村に居住していたのが10人、出稼ぎなどでフラフラ村には不在であるケースはわずか5人であった。夫が賃労や商売を行っていることで現金収入が見込めるような女性は、自らミルクの販売を行わず、年間を通して販売を行う女性に依頼する傾向がある。

次に、ミルク販売を行っていた女性たちの世帯構成をみた(表11)。71人のうち、ひとり離縁世帯の女性であった。残りの70人は、単婚完全世帯、一夫多妻婚完全世帯、単婚寡婦世帯、

表11 ミルク販売者の世帯の特徴 (1999年12月)

世帯の特徴	単婚世帯	一夫多妻婚世帯	賃合計(人)	
完全世帯	33	26	59	( 84%)
寡婦世帯	4	7	11	( 16%)
合計 (人)	37	33	70	(100%)
	[53%]	[47%]	[100%]	

一夫多妻婚寡婦世帯のいずれかにあてはまった。単婚と一夫多妻婚世帯に所属する女性の数は、それぞれ37人 (53%) と33人 (47%) とほぼ同じ割合を示していた。また、完全世帯と寡婦世帯の割合は、完全世帯に所属する女性が59人 (84%)、寡婦世帯 (16%) と完全世帯が高くなっている。

#### 4-3. ミルク販売による売上の分配

##### 4-3-1. 販売者と委託者

年間を通じてミルクの受託販売を行っていた女性Aを対象に、彼女が実際に販売していたミルクのカップ総数と総売上金額の季節変化を調べた (図13)。資料は、1998年10月から1999年1月までの約4ヶ月間で、7~22日間隔で6回分とったものである。この期間は、乾季にはじまり、10月下旬から1月上旬まで雨季が続いて、再び乾季となった。当時のマルサビットにおける降雨量は、1998年10月が0.8mm、11月が11.2mm、12月が9.1mm、そして1999年1月が1.2mmと変化していた。

同時期、女性Aによる販売カップ数も21~55カップの間で変化した。雨季の初期である1998

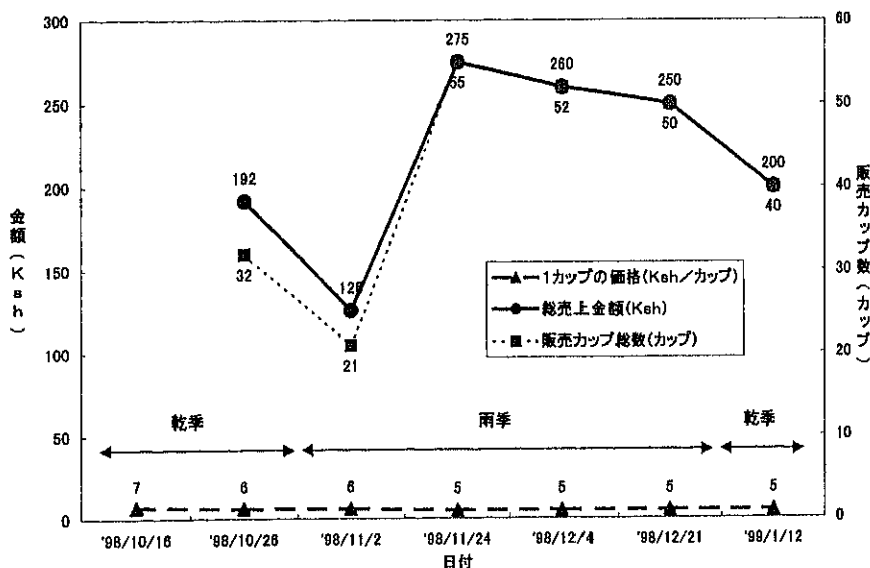


図13 マルサビットにおけるミルクの1カップ (150cc) あたりの販売価格と販売ミルク量

表12 女性Aが販売したミルク量の季節変化とその内訳

季節	販売日	販売者					合計 (カップ)
		女性A	女性B	女性C	女性D	女性E	
雨季	1998/10/26	4	13 (2)	11 (1)	3 (0)	1 (0)	32 (3)
雨季	1998/11/2	4	11 (3)	3 (0)	3 (0)	0 (0)	21 (3)
雨季	1998/11/24	5	33 (8)	7 (0)	9 (0)	1 (0)	55 (8)
雨季	1998/12/4	4	32 (8)	8 (0)	0 (0)	8 (4)	52 (12)
乾季	1998/12/21	4	35 (9)	7 (0)	4 (0)	0 (0)	50 (9)
	1999/1/12	4	28 (6)	1 (0)	2 (0)	5 (0)	40 (6)
総計 (カップ)		25	152 (36)	37 (1)	21 (0)	15 (4)	250 (41)
受託報酬率			24%	2%	0%	27%	20%
平均 (カップ)		4	25 (6)	5 (0)	4 (0)	3 (1)	42 (7)
[%]		[10%]	[60%]	[12%]	[10%]	[7%]	[100%]

注) 女性Aは、自給したミルクのほかに、他の女性 (B, C, D, E) から受託したミルクも販売していた。

( ) は内数で、受託販売の手数料として取得したミルク量である。

年11月2日に販売カップ数は21カップと最低量に落ち込んだが、11月24日には、その2.6倍である55カップに増加した。その後、販売カップ数は、1月半ばの乾季に向けてゆるやかに減少している。ミルク1カップあたりの単価は5～7シリングであったことから、総売上金額も販売カップ総数に対応して126～275シリングの間で変化した。

表12は、女性Aが販売したミルクのカップ数とその提供者を示したものである。女性Aは、夫が所有する3頭の泌乳ウシから得られたミルクに加えて、同一クラン員である女性B、そして、同一クラン員ではないが同じ街区に居住する女性3人 (C, D, とE) から依頼されたミルクを販売していた。女性Aの販売カップ総数の平均は42カップであり、そのうち女性A自身のミルクは4カップ (10%) であった。女性Aは、自分のミルクよりも他人のミルクを大量に受託して販売していた。販売カップ総数が季節変化する一方で、女性Aが自給したミルクのカップ数は、季節に変わりなく4～5カップであった。女性Aは受託販売の報酬として提供者からそれぞれミルクを受け取っていた。カッコ内に記された数は、受託販売の報酬として女性Aに与えられたミルクのカップ数を示している。女性Aの受託報酬率をみると、受託したミルクの0～27% (平均20%) を報酬として受け取っていることがわかる。報酬としてミルクを現物で与えることが少ない女性Cと女性Dは、女性Aの近隣者であり、女性Aがミルク販売を行っている間、女性Aのために薪拾いと水汲みを行っていた。

女性Aが、自分と他人のミルクを販売することで得た売上額の季節変化をみた (表13)。全体の売上金額の平均は、55シリングであったが、乾季で46シリング、雨季で63シリングと季節変化している一方で、自給ミルクの売上は、季節に変わりなく22シリングであった。女性Aは泌乳量が増える雨季に受託販売することでさらに多くの利益を得ていた。夫が泌乳ウシを多く所有していなくても、女性Aのように年間を通して受託販売を行うことで利益を得ることが可能となっている。このように、販売手数料が見込まれる雨季に販売者は受託の報酬によってよ

表13 女性Aのミルクの売上金額の内訳と季節変化（単位：Ksh）

季節	販売日	女性Aの売上の内訳		合計額 (Ksh)
		自給ミルク	報酬ミルク	
乾 季	1998/10/26	24	18	42
	1999/ 1/12	20	30	50
	総計 (Ksh)	44	48	92
	平均売上金額 (Ksh)	22	24	46
	[%]	[48%]	[52%]	[100%]
雨 季	1998/11/ 2	24	18	42
	1998/11/24	25	40	65
	1998/12/ 4	20	60	80
	1998/12/21	20	45	65
	総計 (Ksh)	89	163	252
	平均売上金額 (Ksh)	22	41	63
	[%]	[35%]	[65%]	[100%]
	平均売上金額 (Ksh)	22	33	55
	[%]	[40%]	[60%]	[100%]

注) Kshはケニア・シリング (1Ksh = 1.6円) を示す。

り多くの利益を得ることができる。

#### 4-3-2. 販売者、委託者、及び委託者の夫

ミルク販売による売上の分配に、夫が介入している例がみられた。女性Aにミルク販売を依頼していた女性Bとその夫の例である。女性Bの夫は、町場の商人に雇われてウシを放牧し、その報酬としてミルクの使用が認められていた。女性Bの夫はキャンプから毎朝ミルクを妻である女性Bに届け、女性Bは自家消費と販売用にミルクを分配した後、販売用ミルクを女性Aの家まで届けていた。女性Bの夫は、町場の顧客との月決め契約を行い、ミルクの運搬と集金を女性Aに委託していた。女性Aは、月決め契約による売上を女性Bではなく女性Bの夫に直接渡し、月決め契約以外の販売によるミルクの売上を女性Bに渡していた。

売却分は、女性B、女性Bの夫、そして女性Aに分配されていた（表14）。乾季では、女性Bと女性Bの夫の利益は、それぞれ44シリング（40%）と同額で、販売者である女性Aの利益は、その半分に相当する21シリング（19%）の利益となっていた。雨季では、女性Bの利益が1日あたり64シリング（45%）と最も高く、女性Bの夫は42シリング（30%）、女性Aは36シリング（25%）の利益が分配されていた。女性Bの夫は、季節に変わりなく月決め契約によって、44ないしは42シリングと、ほぼ定額の売上を獲得していた。

女性Bの夫の月決め契約では、一度に1,000～2,000シリングが得られる。女性Bの夫は、女性は少額であれば家計を支えるために出資するが、高額を手にするると装飾品などに費やしてしまう、と考えている。そのため、彼は女性Bに大金を一度に持たせないようにしていた。

表14 女性Bの販売用ミルクの売上金額とその分配 (単位: Ksh)

季節	販売日	女性B	夫	女性A	合計額(Ksh)	
乾季	1998/10/26	18	48	12	78	
	1999/1/12	70	40	30	140	
	総売上金額 (Ksh)	88	88	42	218	
	平均売上金額 (Ksh)	44	44	21	109	
		[%]	[40%]	[40%]	[19%]	[100%]
雨季	1998/11/2	0	48	18	66	
	1998/11/24	85	40	40	165	
	1998/12/4	80	40	40	160	
	1998/12/21	90	40	45	175	
	総売上金額 (Ksh)	255	168	143	566	
	平均売上金額 (Ksh)	64	42	36	142	
		[%]	[45%]	[30%]	[25%]	[100%]
	平均売上金額 (Ksh)	54	43	29	126	
		[%]	[43%]	[34%]	[23%]	[100%]

注1) 女性Bの夫に配分される売上分のミルクのみ、月決めで支払われていた。

注2) Kshはケニア・シリング (1 Ksh ≒ 1.6円) を示す。

#### 4-4. ミルク販売者によるツケ買い

フラフラ村のレンディーレは、マルサビットの町場で食料品を販売するソマリやブルジの商人に対して、ツケ買いを行っている。レンディーレ女性がミルク販売を行っている市場の中にレンディーレの大幅なツケ買いを認めているブルジ商人の店があった。彼によると、彼の妻の母はレンディーレのサレ・クランの娘であるようだ。

彼のツケ帳簿によると、ツケ買いを認めているレンディーレ女性は26人いた。表15は、ミルク販売を行っていた女性Aと販売を行っていない女性(G, H, I)の特徴を示したものである。女性Aは、20年あまりに渡ってほぼ毎日ミルクを販売してきた。女性Gは、ナイロビで働く夫からの仕送りがある。夫が死亡や離婚によって不在である女性Hと女性Iは、もっぱらねだりを行ったり、家事労働や薪の販売を必要に応じて行ったりすることで現金を獲得していた。

彼の店でフラフラ村のレンディーレ女性たちが1999年1月1日から3月5日の間に行ったツケ買いと返済の記録を調べた(図14)。夫に安定した収入があり、月1回にまとまった返済を

表15 ツケ買いを行っていた女性たちの特徴

女性	主な活動	夫		子供の数 (人)	フラフラ村 居住期間	移住のきっかけ
		主な活動	年齢階梯			
女性A	ミルク販売	ウシ放牧	中位長老	3	17年	ウシ放牧のため
女性G	家事	賃労	下位長老	3	村出身	村出身
女性H	家事	死亡	下位長老	2	1ヶ月	夫の死後、夫の異腹兄弟(HuBr)に依存
女性I	家事	不明(離別)	下位長老	2	6ヶ月	離婚後、父方交又イトコ(FaSiDa)に依存

注) 主な活動では、ミルク販売を行っている女性も家事を行っている



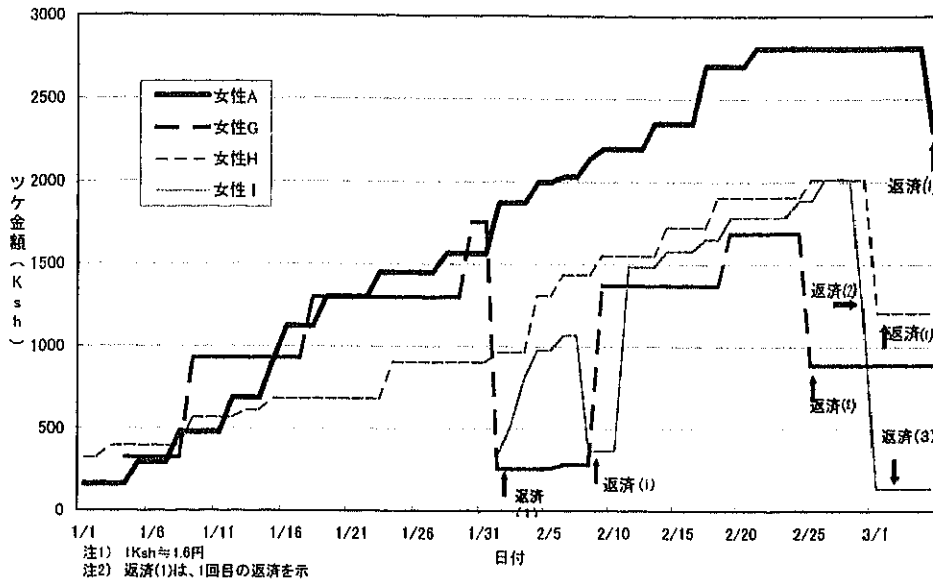


図14 マルサビットの一商店でのレンディーレ女性4人（A，G，H，I）によるツケ買い収支の状況（1999年1月1日～3月5日）

行っている女性G以外は、少額でツケ回数を重ねていた。女性G，H，Iの最高ツケ額の上限は約2,000シリングであるのに対し、ミルク販売を行っている女性Aのツケ額は約3,000シリングにも達していた。女性Aは、2ヶ月以上返済を全く行わなかったため、2月末に返済を強制された。返済に際し、女性Aは、ミルク販売による収益ではなく、借金返済を理由にねだった500シリングを使用した。

## 5. 結 論

フラフラ村で行われていたミルク販売についてまとめる。

まず、ミルク販売は、ウシキャンプ、集落、町場といった3つの基本的な活動場所において、人、ミルク、食料が循環することによって成り立っていた。販売に使用されるミルクは、未婚男性の労働力を軸にしたウシキャンプで生産されていた。一方、ミルクの運搬と販売に関しては、女性の労働力によって行われていた。町場近郊の開拓村における女性が新たに担うこの社会経済的役割は、ミルクという主食を分配するといった牧村での伝統的な女性の役割が拡大化したものとして考えられる。

ミルク販売を伝統的な女性の役割が拡大化したものとして位置付けるにあたって、まず、ミルクの販売者である女性、及びミルク販売を委託する女性、そして男性についてみた。まず、販売者には、年間を通して販売を行う女性と、泌乳量の増える雨季だけ余剰分のミルクを販売する女性がいる。雨季に少量のミルクを販売する女性の中には、自ら町場へ出向いてミルクを

販売するのではなく、年間を通して販売を行う女性に販売を委託することもある。委託者と受諾者の間では、現金取引はされずに、ミルクを介した協力関係が成り立っていた。

販売者女性の多くは、世帯内の男性が所有するウシから搾乳されたミルクを販売し、夫が牧畜セクターに従事しているような女性が多数を占めていた。一方で、夫が死亡や離婚などによって不在であり、他人のミルクを受託販売するような女性も2割近くいた。実際、ミルク販売は、家畜を持たないで移住してきた女性や、自分に与えられたミルク量が少量である女性たちが、他人のミルクを受託販売することによって自活できるひとつの手段となっていた。ミルク販売という役割を通して、女性たちは、レンディーレ以外の人々が多く居住するマルサビットの町場の人々と顧客関係や貸借関係を結んでいる。この意味において、ミルク販売は、単に現金獲得のための手段ではなく、町場近郊の開拓村といった新たな社会環境においてレンディーレ女性が担っている役割の一つであると言える。

次に、ミルク販売によって得られた収益の分配をみた。女性Aのケースでは、泌乳量の増える雨季に販売手数料が自分のミルクによる売上を上回っていた。このことから、畜産物であるミルクが積極的に現金化されても、所有するミルクの量に差がある女性たち間の経済格差は必ずしも大きくなっていないことが明らかになった。しかしながら、ミルクによる収益が、月決めなどで一度に多額の利益をもたらす女性Bのケースでは、男性が取引に参入していた。つまり、ミルクによる収益の大半は日々の食料品に費やされる程度に留まっており、女性の個人的な必要に応じた経済活動は制約を受ける傾向にある。このような事実から、町場のミルク販売は、レンディーレ女性が牧村の食物分配において担ってきた伝統的な役割と同じような機能を果たしていると言える。

## 引用文献

- Buhl, S. & K. Homewood 2000 Milk Selling among Fulani Women in Northern Burkina Faso, D.L. Hodgson (ed.), *Rethinking Pastoralism in Africa: Gender, Culture & the Myth of the Patriarchal Pastoralist*. James Currey, Oxford: 207-226.
- Dahl, G. 1987 Women in Pastoral Production: Some Theoretical Notes on Roles and Resources, *Ethnos* 1 (2): 246-79.
- Fratkin, E. 1991 *Surviving Drought and Development: Ariaal Pastoralists of Northern Kenya*, Westview Press: Boulder.
- Fratkin, E. & K. Smith 1995 Women's Changing Economic Roles with Pastoral Sedentarization: Varying Strategies in Alternate Rendille Communities, *Human Ecology*, 23 (4) : 433-454.
- Kenya Government 1994 *Kenya Population Census 1989*, Vol.1, Central Bureau of Statistics.
- 菊地美貴子 2001 「遊牧社会レンディーレにおける物質文化と平準化機構」筑波大学大学院環境科学研究科修士論文.

- Little, P.D. 1994 Maidens and Milk Markets: The Sociology of Dairy Marketing in Southern Somalia. E. Fratkin, K. Galvin & E. Roth (eds.), *African Pastoralist Systems: An Integrated Approach*. Lynne Rienner Publishers, Boulder, London.
- Sato, S. 1980 Pastoral movements and the subsistence unit of the Rendille of Northern Kenya: with special reference to camel ecology, in S. Wada & P.K. Eguchi (eds.), *Africa*, 2. *Senri Ethnological Studies* 6, National Museum of Ethnology: Osaka, pp.1-78.
- 佐藤 俊 1986 「レンディーレ族の遊牧生活」伊谷純一郎・田中二郎（共編）『自然社会の人類学：アフリカに生きる』アカデミア出版会，pp.147 - 180.
- 佐藤 俊 1987 「ラクダ遊牧民の生計活動と食生活」福井勝義・谷泰（共編）『牧畜文化の原像：生態・社会・歴史』日本放送出版協会，pp.357-419.
- 佐藤 俊 1992 『レンディーレ：北ケニアのラクダ遊牧民』弘文堂.
- Sato, S. 1992 The camel trust system in the Rendille society of northern Kenya, *African Study Monographs*, 13(2): pp.69-89.
- Sato, S. 1997 How the East African pastoral nomads, especially the Rendille, respond to the encroaching market economy, *African Study Monographs*, 18(3-4): 121-136.
- Sato, S. 1998 The Rendille and the adaptive strategies of East African Pastoralists, in Kurimoto, E. & S. Simonse (eds.), *Conflict, Age & Power in North East Africa: Age Systems in Transition*, James Currey: Oxford, pp.206-226.
- 佐藤 俊 2000 「レンディーレ社会におけるねだりの社会的制御」『歴史人類』28：3-42.
- Schlee, G. 1989 *Identities on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*, Manchester University Press: Manchester.
- Smith, K. 1997 *From Livestock to Land: The Effects of Agricultural Sedentarization on Pastoral Rendille and Ariaal of Northern Kenya*. Ph.D. thesis, Pennsylvania State University.
- Smith, K. 1998 Sedentarization and Market Integration: New Opportunities for Rendille and Ariaal Women of Northern Kenya. *Human Organization*, 57(4)：459 - 468.
- 孫 暁剛 2001 『北ケニアのレンディーレ社会における遊牧生態と生計維持機構』筑波大学大学院環境科学研究科修士論文.
- Talle, A. 1988 *Women at a Loss: Changes in Maasai Pastoralism and their Effects on Gender Relations*. Stockholm: Studies in Social Anthropology.